

宮古城辺町

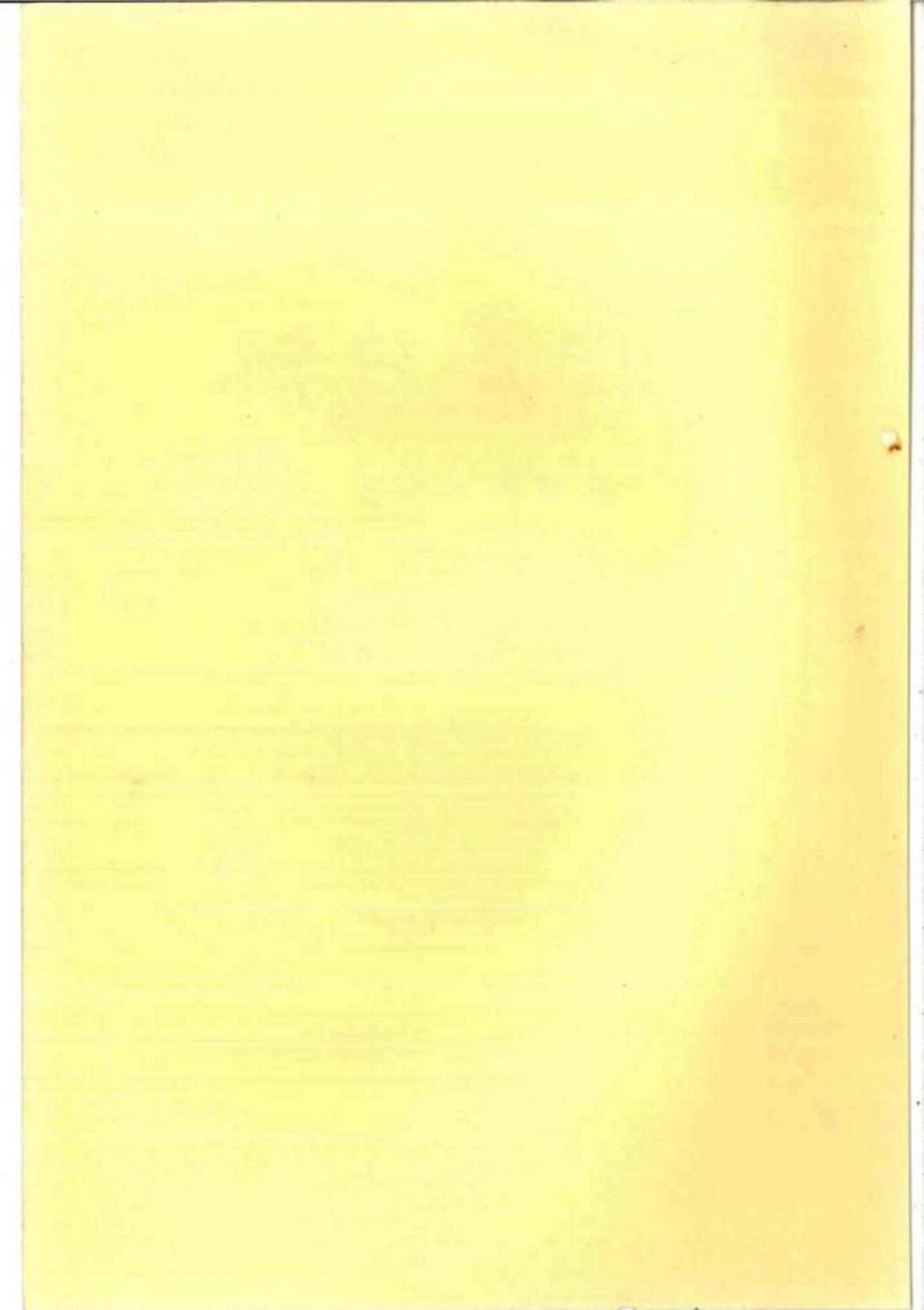
長間底遺跡

発掘調査報告

The Nagamazuku Site Excavation
Discovery of Prehistoric Tridacna Shell Adzes
Miyako Island, Okinawa

1984年3月

沖縄県教育委員会



序

このたび、本書を刊行するにあたり、一言御挨拶を申し上げます。

当教育委員会はさきに宮古諸島における埋蔵文化財の分布調査を実施し、その成果を「宮古島の遺跡」（昭和58年3月）として公表してきたところであります。現在この書が、文化財の知識の普及、研究調査の道標、諸開発計画にあたっての協議調整資料等多方面に活用されていることはたいへん喜ばしいことであります。

さて、この分布調査事業の主要な成果のひとつとして、長間底遺跡の発見がありました。この遺跡はシャコガイ製貝斧が多く発見され、しかも土器や陶磁器は伴わないということから、これまで13・14世紀頃に始まるとされていた宮古の歴史を、遠く原始時代にまで遡らせたという意義をもっておられます。

一方、近年の諸開発、とりわけ農業基盤整備事業の活発化は宮古においても顕著なものがあり、いくつかの地域で埋蔵文化財包蔵地も含まれております。このため、その適切な保存を図るべく関係機関等と、銳意協議調整に努めているところであります。

長間底遺跡についても、一帯に牧場設置事業が計画され、すでに一部実施されている中の発見でしたが、今後どのような保存策を講ずるかということが課題となっておりました。

このようなことから、宮古で初の発見となった原始時代遺跡の内容を把握するとともに、牧場（草地）造成工事との具体的な調整方法を検討するとを目的として、本遺跡の発掘調査を実施いたしました。幸い、包蔵地域は掘り返さず、盛土のみを行うことで調整できました。

この事業には、昭和58年度文化財保存事業費として、文化庁から80%の補助をいただきました。また、調査の実施にあたっては、城辺町教育委員会をはじめ地元の多くの方々の御協力と適切な御助言をいただきました。

各位の御厚意に感謝申し上げるとともに、本書が宮古はもとよりわが県の埋蔵文化財の重要性への理解を深め、さらに多くの方々に有効に活用されることを願うものであります。

昭和59年3月

沖縄県教育委員会

教育長 新垣 雄久

例　　言

1. この調査報告書は、昭和58年度事業として文化庁の補助（80%）を得て実施した宮古郡城辺町長間底遺跡発掘調査の成果を記録したものである。
2. この遺跡は1981（昭和56）年11月に発見された際、長間底海岸の東端部の岬が「与那浜崎」と称されていることから、当初「与那浜貝塚」と命名した。その後の調査でこの低地帯が「長間底」と呼ばれていることに気付いた。遺跡地域を直接指示できる名称としては「長間底」がより適切であると判断し、このたび調査報告書を刊行するにあたり、「長間底遺跡」と改めることとした。
3. これにより、既に当委員会が発行している「掘り出された沖縄の歴史」（1982年2月14日付刊）170ページ所収の「与那浜貝塚」、および「宮古の遺跡」（1983年3月刊）24ページ所収の「与那浜貝塚」は、いずれも「長間底遺跡」として読み替えられたい。
4. 長間底遺跡は宮古島における初の先史（原始）時代遺跡の発見であり、またシャコガイ製貝斧が多数含まれているという点においても重要な意義をもつ。これをより深く検討できるよう便宜をはかるために、これまでに宮古島地域において発見されたシャコガイ製貝斧の紹介も併せて行うこととした。
5. 本遺跡出土の遺物について次の方々に同定をお願いした。記して謝意を表する次第である。

石器の石質同定 神谷厚昭 沖縄県立教育センター

鳥獣骨の同定 金子浩昌 早稲田大学

貝類の同定 知念盛俊 那覇高校

6. 発掘調査および報告書作成業務は次の者により行われた。

(1) 発掘調査

調査員 安里嗣淳

作業員 平良恵子 下地キヨ 平良政子 下地幸子 下地信 砂川久美子
砂川八代 下地芳子 上原ハル 下地峯子 伊計カマド 伊計勝子

(2) 報告書作成

執筆編集 安里嗣淳

実測・トレース 大城秀子 花城潤子

分類・集計 盛本熟 友寄秀子 伊集恵子 大城直子

7. 調査で得られた資料はすべて沖縄県教育庁文化課資料室に保管されている。

目 次

長間底遺跡発掘調査報告

本文目次

序

例 言

はじめに 一遺跡の発見と調査に至る経緯一

I 位置と環境	4
II 調査の経過	8
III 各調査地域の状況	8
1 保存地域の発掘調査	8
2 西側地域・東側地域の掘り返し盛土調査	11
IV 遺 物	13
1 人工遺物	13
(1) 石 斧	13
(2) 磨 石	14
(3) 敲 石	14
(4) 貝 斧	21
(5) 椭円形貝製品	29
(6) ホラガイ腹面有孔製品	29
(7) シャコガイ有孔製品	30
(8) スイジガイ付刃突起製品	30
(9) 猪牙 製品	34
(10) 骨 製 錐	34
(11) 土器・陶器	35
2 自然遺物	37
(1) 掘り返し盛土の自然遺物	37
(2) 試掘トレンチ出土の自然遺物	37
おわりに	44
附① 宮古島における貝斧の分布	97
② 平良市平瀬尾顧崎遺跡発見の貝斧	100

図目次

図1 宮古島の位置	5
2 長間底遺跡の位置とシャコガイ製貝斧発見遺跡の分布	6
3 長間底遺跡の地形	9
4 長間底遺跡保存地域試掘トレンチの層序	10
5 石斧の部位名称、計測部位および実測表示記号	15
6 石 斧	19
7 石斧・磨石・敲石	20
8 貝斧の部位名称とスイジガイ突起の番号	22
9 貝 斧	27
10 貝 斧	28
11 貝斧、橢円形貝製品、シャコガイ有孔製品、ホラガイ腹面有孔製品、 スイジガイ付刃突起製品	31
12 スイジガイ付刃突起製	32
13 スイジガイ付刃突起製品、猪牙製品、骨錐	33
14 土器、陶器	36

図版目次

1 発見当時の長間底遺跡	47
2 後背丘西側より長間底をのぞむ	48
3 上、東側地域、下、保存地域	49
4 上、東側より長間底をのぞむ 下、保存地域試掘トレンチ	50
5 保存地域試掘トレンチ	51
6 発掘状況	52
7 石 斧	53
8 "	54
9 "	55
10 "	56
11 "	57
12 "	58
13 "	59
14 "	60
15 "	61

16	石斧の破片とみられるもの	62
17	磨 石	63
18	敲 石	64
19	"	65
20	"	66
21	貝 斧	67
22	"	68
23	"	69
24	"	70
25	"	71
26	"	72
27	"	73
28	"	74
29	"	75
30	"	76
31	貝斧類似の貝殻片	77
32	椭円形貝製品	78
33	イ. ホラガイ腹面有孔製品 ロ. シヤコガイ有孔製品	79
34	スイジガイ付刃突起製品	80
35	"	81
36	イ. スイジガイ付刃突起製品 ロ. 猪牙製品	82
37	"	83
38	骨 雜	84
39	"	85
40	"	86
41	土器(上)・陶器(下)	87
42	自然遺物、獸骨(イノシシ)	88
43	" "	89
44	" "	90
45	" "	91
46	" 獣骨(ジュゴン)	92
47	" 鳥・獸骨(鳥, カメ)	93
48	" 貝 類	94

49	自然遺物 貝類	95
50	" "	96

表 目次

1	長間底遺跡掘り返し盛土出土の鳥獸骨	38
2	保存地域試掘トレンチ出土貝類	39
3	試掘トレンチⅢ層の有孔貝出土状況	43

The Nagamazuku Site Excavation
Discovery of Prehistoric Tridacna Shell Adzes
Miyako Island, Okinawa

Miyako Island is centrally located between Taiwan and Okinawa Island. The island is basically flat, with the highest geographical point being only 106 meters. The land content is largely limestone. A few creeks may be found near the coast, and in the areas surrounding, sand dunes have formed. On the sand dunes of one of these creeks in the northeastern part of the island, called Nagamazuku, is what is now called Nagamazuku Site.

In the fall of 1981, large-scale commercial digging began on this site. The sand was to be used for the manufacturing of construction material. At the time of this digging, some tridacna shell adzes (curved blade curving tools) were turned up, but the commercial activity continued as usual until the spring of 1983.

From 31 May to 17 June 1983, an excavation in search of prehistoric artifacts was conducted and numerous prehistoric artifacts were indeed found; 9 tridacna shell adzes, 8 of which were clearly made using parts of the shell hinges, the thickest part of the shell (the construction of the ninth adze is yet uncertain, but it appears as if it, too, was made from the shell hinge); 9 stone axes (straight blade cutting tool), 7 of them being in excellent shape, the remaining two damaged, and drills made of wild boar bones. The blades of the adzes and axes appear to have been polished. Thus three types of tools, each constructed of a different natural material were discovered during the trial excavation: tridacna shell adzes, stone axes, and animal bone drills. As Miyako Island had no stone suitable for such tools, it is believed that the stone to make these tools, or perhaps the tools themselves had come from the neighboring Yaeyama Islands.

A trial excavation was conducted in a 4×6 meter square area on the remaining sand dunes; the trench cut through five visible layers of earth. The first layer of sand and clay is artificial, being only recently formed during the digging previous to the archeological excavation. The second layer is made up of clays which have been accumulated since prehistoric times. This layer appears to have been formed from clay which had been carried to the site from the hills behind. This layer has, until recently, been used for the cultivation of rice. The third layer is approximately 35 to 40 cm thick at this site, and consists of a gray colored sand. This layer proves to be the most significant concerning the recent findings. The tool artifacts, although found scattered throughout the first and second layers are believed to have originally come from the third layer. Also, in this layer clues have been given as to the cooking and eating habits of the island inhabitants. Seashells and charred stones and coral have been discovered, suggesting the cooking

method of sand baking. Fire heated coral stones were placed on the sand. Fish, shellfood, and other foods were then placed between and upon the hot coral stones to bake. Only two of the total number of artifacts were found in this layer. The fourth visible sand layer is a yellowish brown color. The fifth layer, the foundation layer, is made up of white sand.

The findings at Nagamazuku Site have great anthropological significance for Miyako Island. There are three primary reasons for this. This is the first discovery leading to the belief that man lived on Miyako Island during a prehistoric era. It was formerly believed that Miyako was first inhabited sometime between the thirteenth and fourteenth century. Secondly, it is the first time for artifacts to have been found in the coastal sand dunes of the island. All other sites of archeological finds are located on the limestone terraces. Thirdly, it reveals that even in prehistoric times, the inhabitants of Miyako and Yaeyama had at least some aspects of their cultures in common.

To date, five similarities in the archeological finds between Yaeyama sites and Miyako sites may be drawn: 1) Tridacna shell adzes were found. 2) Stone axes (edge ground type) were found. 3) Large quantities of charred stones were discovered. 4) No pottery has been found. 5) The sites were located on sand dunes.

The tridacna shell adzes are significant in the consideration of the communication and cultural flow which may have existed during prehistoric times. Shell adzes have been found throughout the South Pacific. The shell adzes found in Miyako and Yaeyama are very similar to those found on Parawan Island in the Phillipines; therefore suggesting a very early cultural influence coming from the Phillipine Islands.

宮古城辺町

長間底遺跡発掘調査報告

調査者 安里嗣淳

(沖縄県教育庁文化課主任専門員)

はじめに 一遺跡の発見と調査に至る経緯一

長間底遺跡は、沖縄県教育庁文化課による宮古地区遺跡詳細分布調査事業の実施中、1981年11月に発見されたものである。

この遺跡の発見は、宮古島にとって三つの点できわめて画期的な意義をもつものといえる。まず、宮古諸島地域における先史時代（原始時代）の人と文化の存在を示す、初めての考古学的資料が得られたということである。これまで宮古諸島の歴史の始まりはかなり新しく、13・14世紀頃に人の定住が開始されると考えられていたのである。

次に、八重山地域の先史時代第Ⅰ期に属する無土器新石器の文化が、宮古島にまで及んでいたことが初めて明らかとなったことである。とりわけ比較的多数のシャコガイ製貝斧の出土は、石垣島名蔵貝塚群の様相によく似ている。

さらに、宮古島の砂丘地にも遺跡が形成されていることが判明したことである。宮古島の既知の遺跡は台地や丘の上に立地しており、砂丘遺跡は全くといってよいほど発見されていない。この遺跡の発見により、今後海岸砂丘地における遺跡分布について十分な目配りをする必要が生じてきた。

さて、宮古島においても近年さまざまな分野における開発、なかでも農業基盤整備関係の事業が活発になってきている。この長間底の砂丘地には、大規模な採砂と牧場（草地）設置事業が計画されるところとなった。

そもそもこの遺跡の発見は砂取り工事が端緒となったものである。長間底はかつて広い砂丘であったが、後背地の丘の粘土層（石灰岩の下層にある灰色の土）や石灰岩の上にある赤土が流入堆積し、砂地の多くの地域を覆ってしまった。

1981年この上層の流入土を剥ぎ、下層の砂を取り出す工事が行われたのであるが、11月にこの地の踏査をした沖縄県教育庁文化課職員らが掘り返し砂の中から、シャコガイ製貝斧数点を初めて発見した。（図版1）。

続いて同年12月にも踏査を行ない、シャコガイ製貝斧を再び採集した。この時期には採砂工事は長間底のほぼ中間点に位置する湧水流路（小川）より西側地域の砂を大部分とり終えていた。さらにひき続き東側地域も砂取りを行うとの計画であったので、このときに重機を用いて一帯の試掘調査を実施した。その結果、ほぼ中間点地域に貝層の分布がみられたので、この地域を杭とロープで表示し「保存地域」とした。

その後も保存地域以外の東側の砂取りが継続され、長間底の大部分は1983年3月までに、上層の流入堆積土および灰白色砂が後日の牧草地耕土用として一ヶ所に盛り上げられ、下層の白砂層は工事用砂としてとり出された。

そして採砂後の巨大な凹地には大量の客土が投入され、その上面に耕土として、さきに一ヶ所に盛ってあった流入堆積土が再び敷きつめられた。我々が1983年5月末に発掘作業で訪れたときには、その作業は西側地域はすでに終わり、東側地域を客土中であった。

1983年5月31日に調査に着手することとなったが、この時点で調査の対象は次の3点であった。

- ① 1981年12月に囲った「保存地域」内の文化層の状況を把握すること。
- ② 西側地域の採砂後の客土の上に再び敷きつめられた流入堆積土や灰白色砂の中に遺物が含まれていないかどうかを調べること。
- ③ 東側地域に盛り上げられた流入堆積土、灰白色砂についても同様に調べること。

I 位置と環境

宮古島は琉球列島の中のひとつで、沖縄本島と台湾との間のはば中間点に位置する。島の面積は約159ha、平面形は三角形を呈する。(図1・2。図版2・3)

島の基盤は灰色の粘土層であるが、上面のほとんどは琉球石灰岩およびその風化した赤土がのっている。石器の材料となり得るような岩石の自然分布は知られていない。石灰岩は隆起珊瑚礁であり、全体として高い山地を形成しない。西北から東南方向に低い丘が島のシワの如く数本横たわっている。島の最高位はその丘のひとつ野原岳の標高108mである。

海岸地形は石灰岩台地が後背地で急崖をなしている場合が多い。一般に台地が突き出している地形は岩礁、入江は砂丘が発達している。

長間底遺跡は島の北東側、城辺町と平良市の境界線のある長間底と呼ばれる入江の海岸

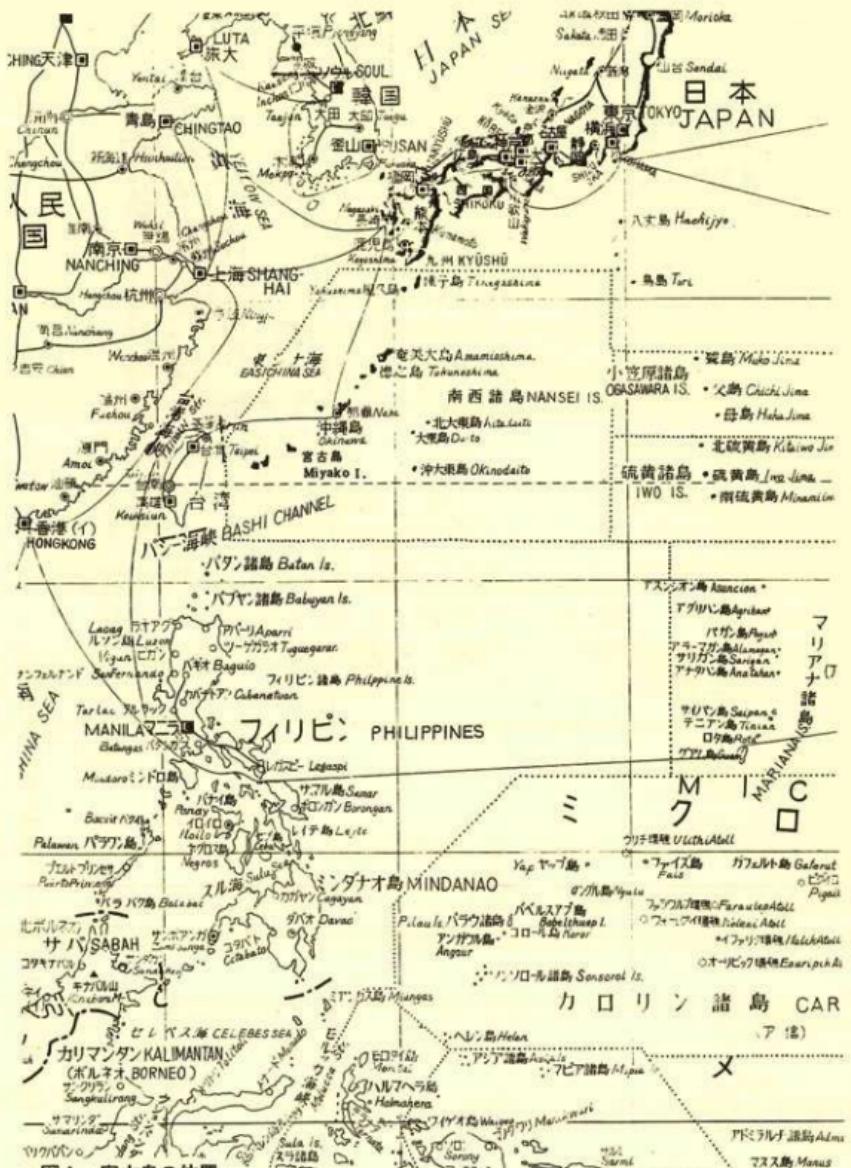


図1 宮古島の位置

1. 成井川洞穴
2. 平櫛尾神崎遺跡
3. 石原城遺跡
4. 萩国元鳥遺跡
5. カアラ貝塚
6. 保良元鳥遺跡
7. 長間底遺跡

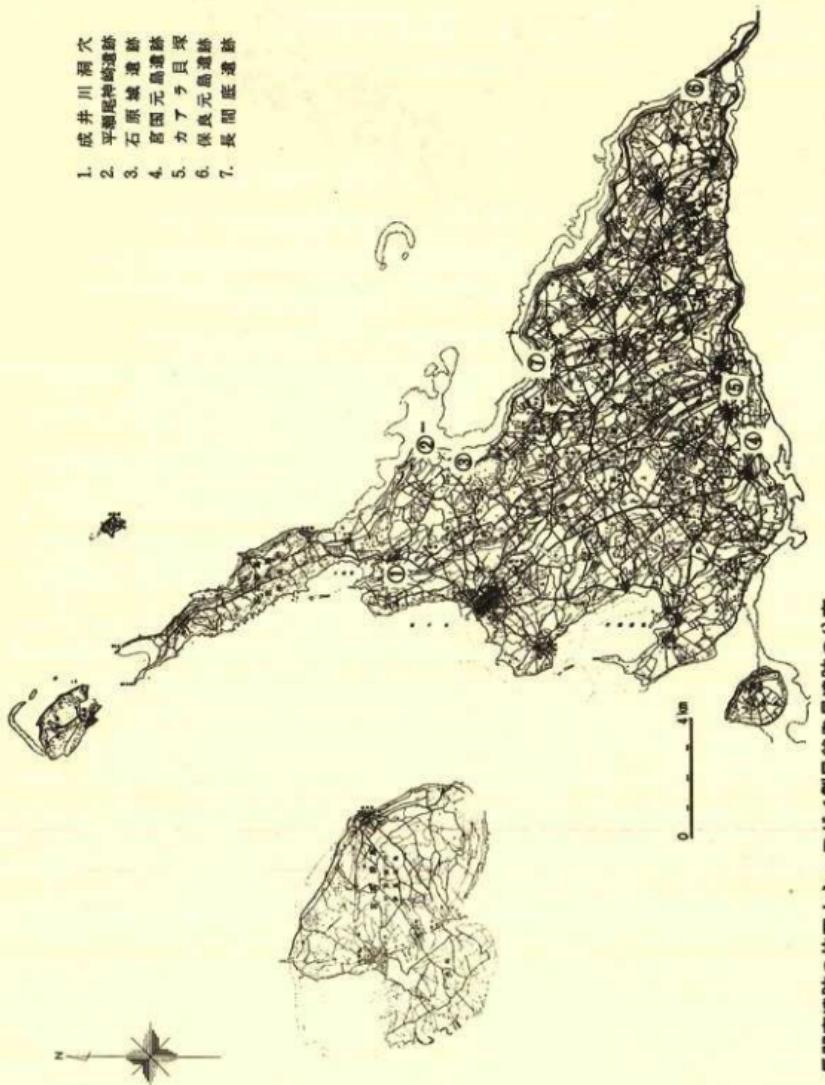


図2 長間底遺跡の位置ヒシャコガイ製貝弁発見遺跡の分布

低地に位置する。大きくは与那浜崎と平瀬尾神崎にはさまれた湾の一部をなすが、長間底はこの湾の中でさらに約1kmの長さの砂丘をもつ小湾を形成している。この小湾は北に面している。(図3)

海は遠浅の礁湖(ラグーン)が発達し、沖に珊瑚礁(リーフ)が白い波を伴なって横たわっている。礁湖内は干潮時には数10cmの深さになり、リーフまで歩いて渡れる。クモガイヤやチョウセンザザエなどが多く生息している。

海浜は長大な砂丘になっている。これはさらに防潮林の内側にも及び、長間底の低地帯を占めていたようである。

後背地には灰色の粘土層に支えられた琉球石灰岩台地の崖縁がひかえている。丘の縁辺部で標高およそ55mある。標高約1.5mの砂丘地に、この後背丘から長年にわたり雨水によって削られた土が流れ込み、30cm～1m余の厚さのゆるやかな傾斜をもつ平地をつくりあげた。これに伴ない砂丘は海岸側へと後退(実質的には増大、汀線が移動)し、現在の形となったようである。

自然湧水がある。源は後背丘の縁辺直下、標高約45mの比較的高位置にある。ここから湧き出た水は斜面の雑木林を音をたてて伝い、長間底の低地に溝をえぐり小川となって海へ注ぎ込む。水量はかなり多い。源が45mの高位置にあるのは、そのレベルが基盤の粘土層の上面と上層の石灰岩との境界付近であることを示している。すなわち、粘土層は粘性の不透水層であり、上層の水をよく吸収する石灰岩に浸み込んだ雨水はこの面で止まり溜まっていく。

湧水は今度は横方向へと流れを変え、崖面の両地層の境界付近から流れ出る湧泉となるのである。これは宮古島に限らず、沖縄本島の石灰岩地帯でもみられる現象である。また宮古ではタテ方向に洞穴が開いていることがあり、内部に湧泉(地下水の小川)を伴なうこともある。人々はこれに階段をとりつけ、「降り井」と称して集落の共同水源地として活用してきた。

長間底の湧泉は一帯の低地を潤し、「長間田」と称される水田地帯の営みを長年に亘って支えてきた。宮古島は湧水が主体で河川は発達していない。島が小さく山地がないのと、石灰岩が吸水性に富むからだと考えられる。

かなり古い時期には大陸と地続きの時代もあったといわれ、象の化石が発見されたこともある。また更新世のある時期にはシカも棲んでいたようであり、石灰岩洞穴などでシカの化石が発見されている。

数年前には、上野村のビンザアブと呼ばれる石灰岩洞穴で、ヒトの化石骨が発見された。更新世に属するとしているので、旧石器時代人の可能性をもつが、人工遺物は未確認であり、その文化内容は不明である。

II 調査の経過

調査は1983（昭和58）年5月31日から6月17日まで実施した。

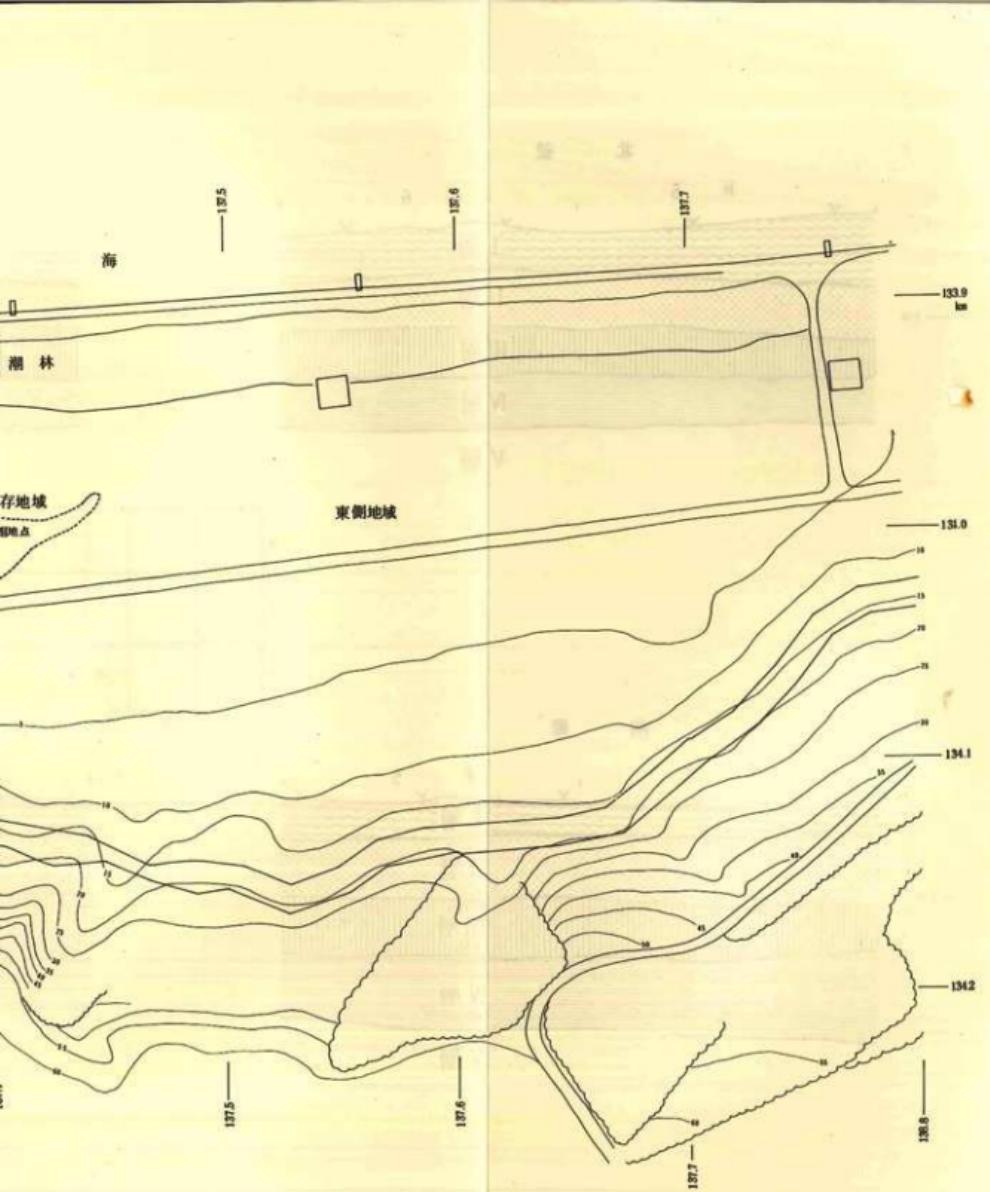
調査内容は保存地域の試掘調査と、東西両採砂地域の流入堆積土・灰白色砂（掘り返し盛土）からの遺物採集である。保存地域を境に、その西側地域の盛土の調査を5月31日～6月1日、保存地域の試掘を6月2日～9日、東側地域の盛土の調査を6月10日～14日、全体の再チェックを15日～17日に実施した。（図版5、6）

III 各調査地域の状況

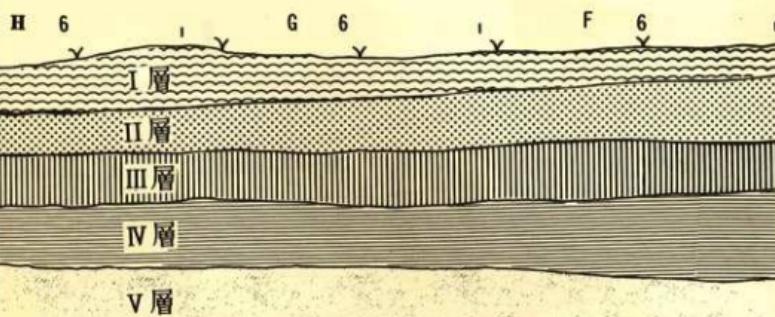
1 保存地域の発掘調査

図3に示すように、南北に6m、東西に4mのトレンチを設定し、 $2 \times 2\text{m}$ 単位の6グリッドに区画した。表示記号は経線を算用数字、緯線をアルファベットで表わし、この組合せによって命名した。F-5・6、G-5・6、H-5・6で、計24m²の範囲である。（図版4下）発掘の結果、層序は次のとおりであった。（図4、図版5）

- I層 客土層。1981年秋から1983年春にかけて行われた採砂工事の際、この一帯に敷きつめられた土砂の層である。近くの土砂を掘りあげたものなので、砂と黒土の塊が混ざりあっていて色は一定しない。貝殻が少量みられる。これは掘り返し土砂の中に、後述するⅢ層の灰白色砂が含まれていることによるのであろう、他に遺物はない。
- II層 本来の表土層。上面（I層との境目）にはまだ生きている緑色の雑草がみられた。I層に覆われてから、そう長くないことを示している。厚さ40cm程の黒色の泥土である。無遺物層。近世から現代にかけての田畠耕作土である。一帯が「長間田」と通称されるのは、水田時代の名残である。
- III層 灰白色を呈する砂層、遺物包含層。厚さ35～40cm。チョウセンサザエ、シャ

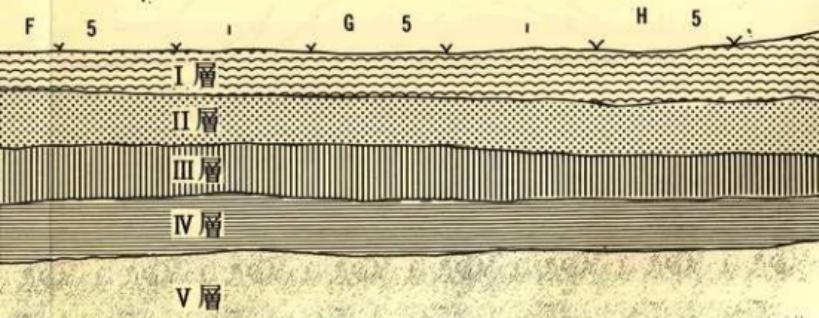


東 壁



0 2m

西 壁



コガイ、クモガイ、サラサバティなどの貝殻、サンゴ石および焼けたサンゴ石の出土が目立つ。一定レベルに貝殻や石が集中している面がある。

貝斧 2 点、橢円形貝製品 1 点の人工品が得られた。石器と土器は含まれない。

- IV層 上のⅢ層と下のV層（基盤白砂）との中间層である。本来は基盤白砂層と同一であったが、Ⅲ層の色が浸み込んだものとみられる。黄白色を呈する砂層である。
無遺物層。厚さ 50 cm 前後。

- V層 基盤をなす白砂層である。水磨を受けた貝殻やサンゴ石などが含まれている。
さきの西側地域の採砂工事の際の観察では、海平面以下の深さに及ぶようである。
このトレンチでは標高 95 cm で含水面（湧水ライン）となったため、それ以下は中止せざるを得なかった。

以上の層序から推すと、この長間底の地形は次のような経緯で現在に至ったものと解される。

- ① 長大な砂丘が形成される。
- ② 砂丘上に先史時代人が居住活動をする。
- ③ すでに以前から進行していた後背丘の土の浸触流出で砂丘が徐々に覆われていく。
先史人がどの時期にこの地を離れたかは不明だが、彼らの生活面であった砂地はこれによって地下へ埋もれることとなった。
- ④ 海浜汀線は次第に海側へと移動し、その分だけ長間底の陸地が増えしていく。
- ⑤ 近世の頃からこの地が農地として開発される。始期は不明だが、水田耕作も行われ、「長間田」の称が生まれる。後述する最上層（防潮林の近く）砂の中にみられた宮古土器や陶器はこの時期以降のものであろう。
- ⑥ 今回の採砂工事によって基盤白砂層まで大きくえぐり取られ、代りに他の地域から土石が客土される。その上に、採砂のときに一時盛り上げてあった掘り返し土砂を再び敷き重ねる。
- ⑦ さらに斜面部のジャーガル土を削り、低地に盛ってカサあげを行う。この報告書が刊行される頃には牧草地となっているはずである。

2 西側地域・東側地域の掘り返し盛土調査

西側地域は、1981年11月の遺跡発見の時点で既に採砂が行われ、大きな凹地となっていた。その後他の石灰岩地帯の土石がもちこまれ、さらにその上にかつての表土層（流入堆

積土）が再び敷きつめられた。1983年5月31日に調査を開始したときには、西側全域に掘り返し盛土が重機（シャボ）の1バケット単位のマウンドの連続で全面を覆っていた。（図版 4上）

これを観察すると、マウンドによっては雨水で表面の土が少し流れた後、貝殻や獸骨が浮きあがって見えるところがあった。このような部分はほとんど黒色の土であった。数点の磨製石斧、スイジガイ付刃突起製品を得た。

東側地域は、表土層が採砂区域の東端に高く積みあげられていた。採砂区域は一部客土がなされており、調査時も進行中であった。本書の写真にみえる池がそれで、西上方の湧泉の水が採砂後の凹地に溜まつたものである。

掘り返し盛土は砂もみうけられたが、大部分は土である。砂の部分には貝殻も含まれていた。土の上面と、砂の中からシャコガイ製貝斧を得た。土の表面から骨製錐を数点得た。しかし各遺物の出土状況は、その直接接する土砂を包含層の土質とみなしえる可能性は強くても確定はできない。

防潮林に近い側の砂地から、わずかではあるが土器片や陶器片を採集した。近世期以降の耕作時代に持ちこまれたものと考えられる。

以上の状況を概括する。

保存地域にみられたⅢ層は長間底遺跡の文化層で、無土器で貝斧と焼石を出土する遺跡である。掘り返しの砂中から検出された貝斧はこのⅢ層に属するものであろう。石器も同時期とみられるが、明らかに砂中からとり出したものはない。黒土の中よりの検出である。骨製錐も同様である。

これよりすると、この長間底は場所によっては後背地の土の流入中にも先史時代人の活動は続けられ、砂層（Ⅲ層）の生活層も残しつつ他の地点の土の上にも地点貝塚の如き生活遺物を残したものと考えられる。

明らかに時代の降るさきの土器片や陶器片のはかに、宮古島でよくみられる台地上の集落跡のような文化層は発見されないのであるから、この長間底遺跡の貝斧・石器・骨製錐が無土器新石器文化期（八重山編年第I期）に属するものであることは確実である。

広大な地域における飛地的な包含層は、同じ時期の石垣島の遺跡にも例がある。

調査で得られた人工遺物のほとんどは、掘り返し盛土の土砂からの検出である。搅乱層からの出土ということになるが、明らかにこの一帯の地中からの掘り返しであるから、長間底遺跡への帰属性は高い。

人工遺物には石斧、磨石、敲石、貝斧、スイジガイ付刃突起、有孔二枚貝、骨製錐、土器、陶器などがある。

自然遺物には貝殻、サンゴ石、イノシシの骨などがあった。

以下各遺物について紹介する。

1 人工遺物

(1) 石斧

石斧と認定できるもの 9 点、石斧の破片とみられるもの 2 点が得られた。このうち完形品は 7 点である。

素材は緑色片岩のみである。石垣島の産である。宮古諸島には琉球石灰岩（珊瑚石灰岩）だけが分布しており、緑色片岩のような石器の素材となる岩石は産しない。はかに加工されていない石片も多数みられるので、彼地より原石をもちこみ、遺跡地において加工したものであろう。

石斧の製作は打剥によって斧の基本形をつくり出し、さらに小さな剥離や敲打を加えて整形している。とくに側面には敲打による潰しが集中的に施されていることが多い。

刃部にはよりていねいな研磨を施してある。基部についても研磨してあるものと、刃部以外は粗面のまゝのものとがある。粗面はいずれも凹部である。全面磨製と局部磨製の相違は現象的には凹面の表面積率による。一般に八重山 I 期には局部磨製石斧が多いので、この時期の文化的特質のひとつであることは、既に多くの人が指摘しているとおりである。

基部の側面に軽い凹みや打剥がみられるものがある。柄に取り付ける際の緊縛を意図して造り出したものとみられる。基端部（頭部）は敲打による潰し（または潰れ）がみられ、丸みをもつものが多い。

刃部は両面からの砥ぎ出しが 9 例中 8 例を占める。平面形でみると刃縁が弧状（いわゆる始刃）を呈するもの、隅丸でやゝ直線に近いものがある。前者が多い。

全体平面形でみると、①、刃面の幅が最も大きく、基部へ向かって次第にせばまり、基端部で最も小さくなる長台形、②、刃部から基端部までほぼ同じ幅の長方形（いわゆる短

冊型)、③. 基部の中間でやや有段状になって細くなり、中間から基端までは同じ幅のもの、④. 基端の幅が最も大きく、刃部へ向って次第に細くなるもので、①とほぼ逆の形となるものがある。

側面は敲打によって仕上げられるのが一般的である。

刃部を側面形でみると、①. 中心軸の両側にはば対称形をなすもの、②. 刃先が中心軸よりやゝ一方へ偏よるもの、③. かなり偏るもの、④. 全体が反るものがある。

使用痕については刃縁付近に条痕がついているものがある。内側にタテ方向にあり、柄の方向と斧の刃面とが直交するもの(ヨコ斧・手斧)についての使用痕であろう。

ほかに石斧の破片ではないかとみられるものが2片ある。石質はいずれも緑色片岩、破片の一部に研磨がみられる。大きい方の破片の研磨は刃面の一部かとみられる。(図7の3. 図版16のイ) 小さい方はどの部分か不明である。(図版16のロ)。

(2) 磨 石

完形品が1点、破片が1点得られた。完形品(図7の4、図版17)は重量440gで重量感がある。片面は研磨の滑面があり、もう一方の面は滑面ではなく、やや凹みをもった敲打面がある。安山岩製。

(3) 敲 石

3点得られた。いずれも完形品であるが、非対称形で不揃いである。自然円礫を利用したもので、長軸方向の端部(頭部)に敲打面をもち、側面に研磨を施すという点は3点とも共通している。

図7の5(図版18)は安山岩製で重量感がある。重量は470g。断面が隅丸の三角形の自然礫を用い、二面に研磨一面に打剥を施し、両端に敲打痕をもつものである。面と面との境(隅丸の角)および面と端部の境には敲打調整がなされている。

図7の6(図版19)は閃綠岩製でかなり重量感がある。重量は610g。半球形の自然円礫を利用し、タテ長に打剥した後、残りの面に研磨を加えてある。両端には敲打痕がある。

図7の7(図版20)は緑色片岩製である。断面台形の方柱状に打剥し、下半部の面に研磨を施す。下端部に敲打痕があつて丸味をもつている。上半および上端部は打剥による粗面のままである。胴部の面と面の境の稜になっている部分で二ヶ所抉りをつけてある。このうち一ヶ所はさらに研磨も施してある。全体観は下半部で太くやゝ丸味をもち、上半部は細く明瞭な方柱状となる。

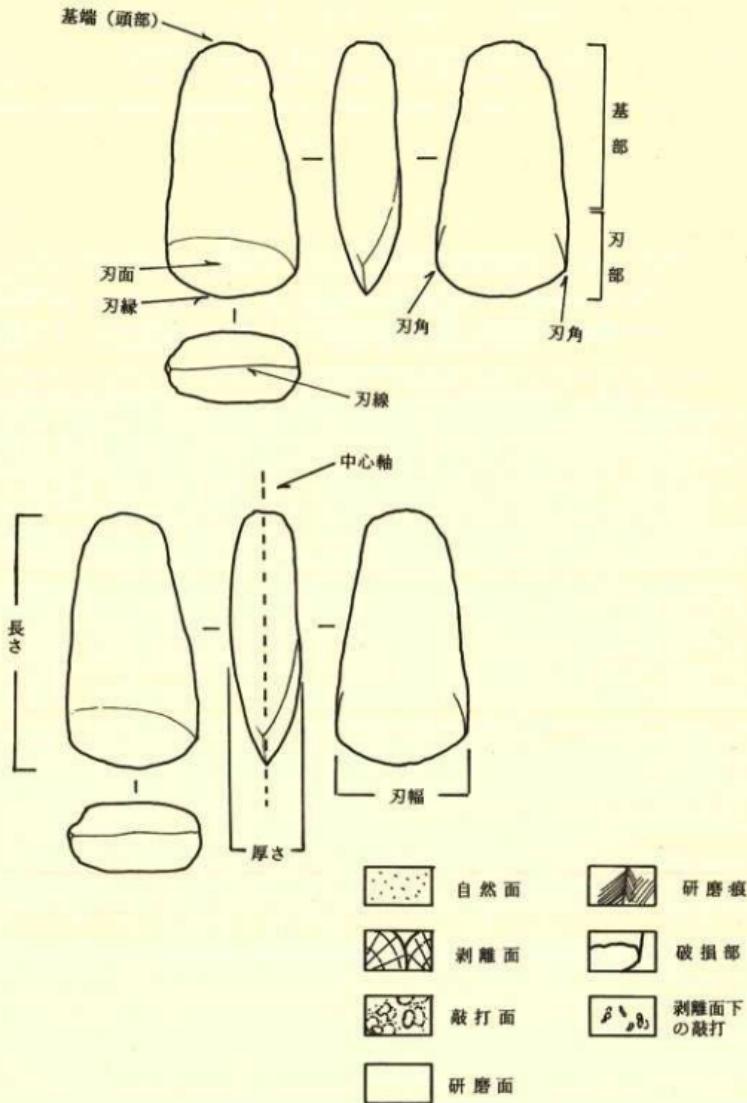
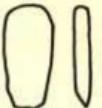
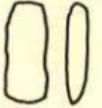
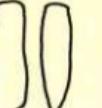


図5 石斧の部分名称、計測部位および実測表示記号

石斧観察表

資料番号	図版	6の1	6の2	6の3
		7・8	9	10
出土地点	掘り返し盛土	掘り返し盛土	掘り返し盛土	掘り返し盛土
石質	緑色片岩	緑色片岩	緑色片岩	緑色片岩
計測値	長さ 刃部 幅 胸部中央 基端 厚さ(最大) 重量(現残存量)	欠損、推定22cm 9.3cm — — 3.8cm 390g	11.8cm 6.1cm 5.6cm 3.3cm 3.2cm 390g	10.1cm 4.8cm 4.8cm 3.6cm 2.2cm 203g
保存状況	刃部と胸下部残存	完全形	完全形	
略形				
種別	タテ斧	タテ斧	タテ斧	
全体平面形	不明、推定長台形	長台形	長方形	
研磨部位	平面研磨、側面敲打	平面研磨、側面敲打	平面研磨、側面敲打	刃部のみ研磨
刃部	刃面 刃角 刃縁 使用痕 刃部偏向	両面砥ぎ出し 角あり、片側角に研磨あり 弧状 — 対称形	両面砥ぎ出し 角あり 側角の研磨なし 強い弧状 対称形	両面砥ぎ出し 角あり、側角研磨なし 一方の角は隅丸角 軽い弧状、斜刃 非対称形、片刃状
基部	胴(A・B) 断面形 側面 基端部	大部分研磨、わずかの凹みは粗面 長橢円形 敲打調整、丸みをもつ 欠失	大部分研磨、わずかに凹面を粗面のままにする 橢円形 敲打調整、丸みをもつ 敲打による潰し(潰れ)あり。丸みをもつ	大部分粗面、ごくわずかの凸部に研磨あり 長橢円形 打剥、敲打調整 敲打による潰し(潰れ)あり
補足	かなり大形の石斧			局部磨製石斧

資料番号	図	6の4	6の5	6の6
	図版	11のイ	11のロ	12
出土地点	掘り返し盛土	掘り返し盛土	掘り返し盛土	掘り返し盛土
石質	緑色片岩	緑色片岩	緑色片岩	緑色片岩
計側値	長さ 幅 厚さ(最大) 重量(現残存量)	4.9cm 2.8cm 3.0cm 1.9cm 21g	10.4cm 3.9cm 4.4cm 3.9cm 32g	1.1cm 1.5cm 111g
保存状況	刃部の一角のみ残存	完全形	完全形	完全形
	略形			
種別	タテ斧とみられる	ヨコ斧	ヨコ斧	
全体平面形		長台形	長方形	
研磨部位	現存部(刃面)は研磨	全面研磨だが粗面多い	刃部のみ研磨	
刃部	刃面 刃角 刃縁 使用痕 刃部偏向	両面砥ぎ出し 隅丸角 側角研磨なし 弧状とみられる 対称形	両面砥ぎ出し 隅丸角 側角研磨なし 強い弧状 片面にのみタテ条痕	両面砥ぎ出し 一方は側角研磨あり あとの方は隅丸角 隅丸の弧状をのぞく と直線に近い 片面にのみタテ条痕 かなり反っている
基部	平面(A+B) 断面形 側面 基端部		凸部は研磨、凹部多く粗面あり 長橢円形 敲打による調整 敲打調整あり 使用磨耗による滑面あり	粗面のまま 長橢円形、扁平形 敲打調整 かんたんな敲打で整形
補足			小形石斧、再加工品か	かなり反りの強い手斧

資料番号	図版	6の7	7の1	7の2
		13	14	15
出土地点	掘り返し盛土	掘り返し盛土	掘り返し盛土	掘り返し盛土
石質	緑色片岩	緑色片岩	緑色片岩	緑色片岩
計測値	長さ 幅 胸部中央 基端 厚さ(最大) 重量(現残存量)	9.2 cm 2.8 cm 4.3 cm 4.2 cm 1.6 cm 120 g	9.0 cm 3.6 cm 3.6 cm 2.8 cm 1.9 cm 127 g	10.4 cm 3.9 cm 3.3 cm 2.9 cm 2.7 cm 179 g
保存状況	完全形	完全形	完全形	完全形
略形				
種別	ヨコ斧か	ヨコ斧	ヨコ斧	
全体平面形	逆長台形	長方形	上半と下半で幅の異なる長方形	
研磨部位	主に刃部研磨	主に刃部研磨	両平面全面、凹部は粗面	
刃部	刃面 刃角 刃縁	両面砥ぎ出し、片面傾斜 両角あり 側角研磨あり	両面研ぎ出し 隅丸角	片面研ぎ出し、一方は胸部面と同一 片側は角あり 一方は隅丸角
使用痕			刃縁にタテ条痕あり	
刃部偏向	片刃状	片刃状	片刃	
基部	胸(A・B) 断面形 側面	粗面多し 長椭円形、扁平 敲打による調整のみ	粗面多い 緊縛を意図した剥離 凹部あり 椭円形 敲打調整 両側に抉りあり	大部分研磨 上半は略円、下半は半円 ていねいな敲打による調整 上半は円く仕上げてある
	基端部	敲打調整あり	敲打調整の潰しあり	敲打による潰し(潰れ)あり
補足	基部より刃部が細い			断面三角自然石利用

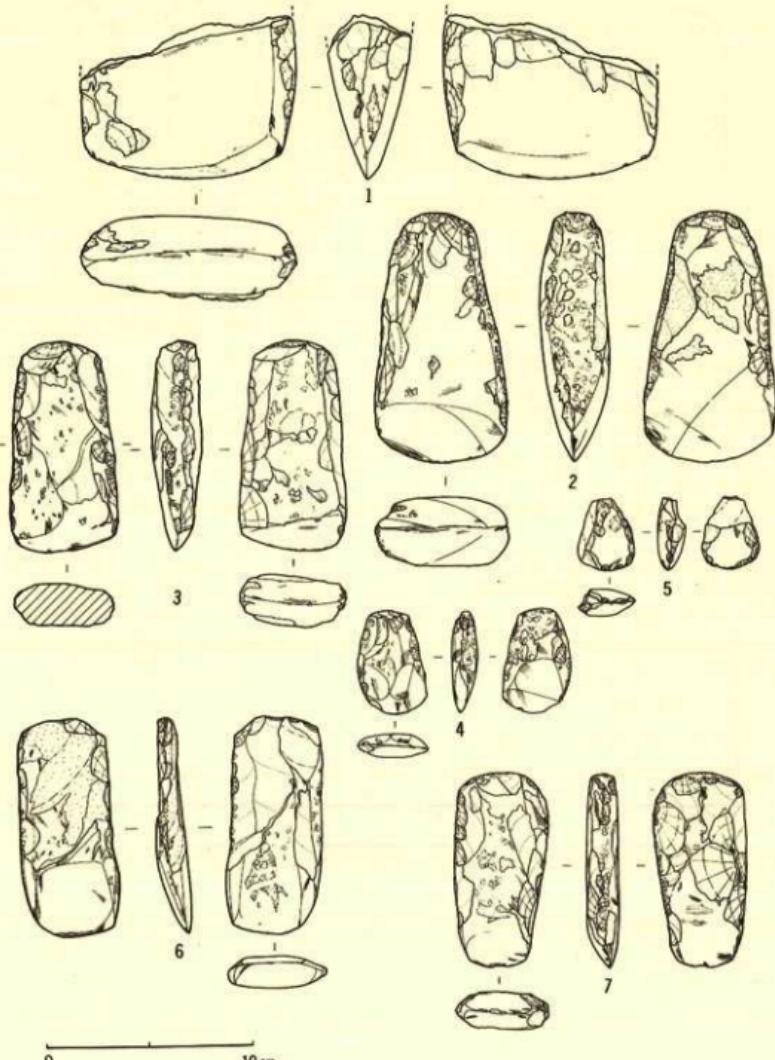


図6 石斧

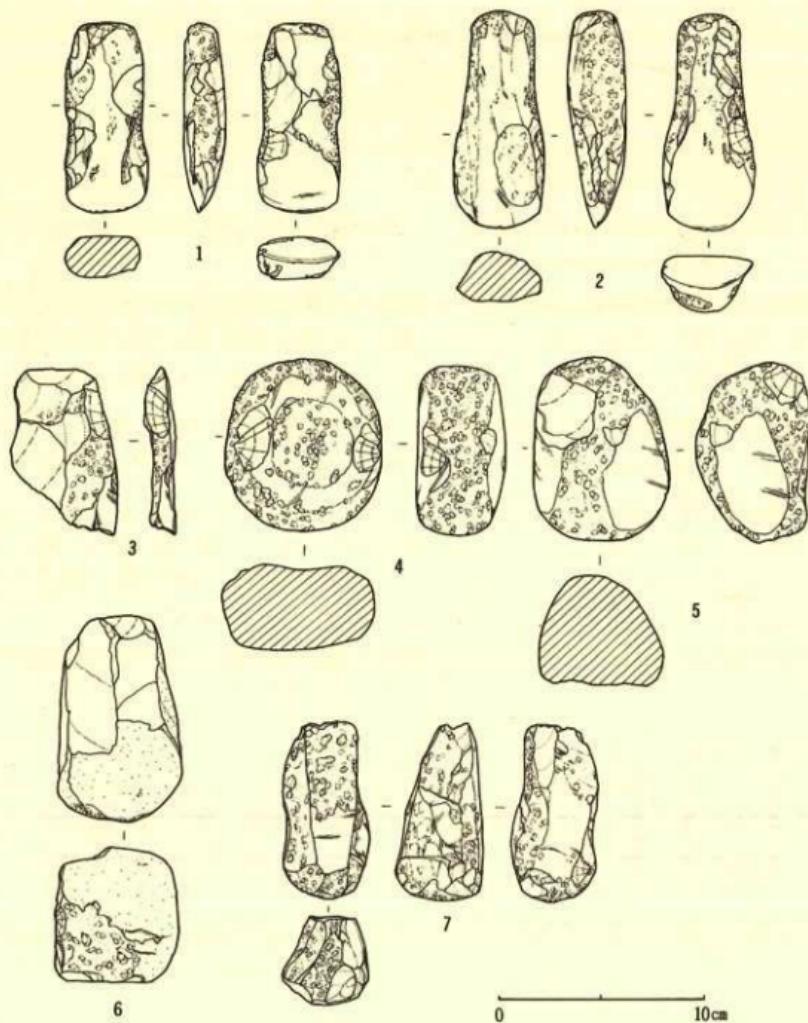


図7 石斧・磨石・敲石

(4) 貝斧

貝斧は11個得られた。ほかに貝斧ではないかとみられるものが2個ある。貝斧11個のうち9個は掘り返し盛土からの発見、2個は保存地域の試掘トレンチ第Ⅲ層からの出土である。

貝斧11個のうち10個はシャコガイ製（うち2個は試掘トレンチⅢ層出土）、他の1個は貝種を特定できないがシャコガイの可能性がある。貝斧とみられる残りの2個はシャコガイである。

シャコガイ製貝斧10個のうち9個はちょうつがい部を、1個は肋を利用したものである。

(イ) ちょうつがい部利用型の貝斧

ちょうつがい部利用型の貝斧は、その素材の利用部位によってさらに二つに分けられる。シャコガイは二枚貝であるので、1個体につき両面各1ヶ所計2ヶ所のちょうつがい部がある。両者は相対し、かみ合っているので、それぞれの側からみると互いに左右反対側にちょうつがい部がついている。主歯・側歯のかみ合わせの関係で互いに凹凸の状態を異にするが、左殻と右殻のちょうつがい部は殻表と殻内の位置が入れ替わるだけで、基本的な形態は共通している。

9個中左殻利用が6個、右殻利用が3個である。貝斧の仕上り状態からすると、いずれの側の殻を用いても胸部が対称形となるほかはとくに差異はなく、形態や機能の際立ったちがいはないものと考えられる。

シャコガイのちょうつがい部は、この貝全体の形状からみて唯一の直線状を呈する部分であり、かつ厚みがある。ヒビ割れも腹部に生じ易いのに対し、この部分はあまり生じないようである。斧の素材として選択されたのは、そのようなことにもよるのであろう。

ちょうつがい部利用型のシャコガイ製貝斧の製作には次のような特色がある。

- ① 殻頂を基準にして、その近位側を必ず斧の頭部（基端部）とし、刃部は遠位側につくる。
- ② 斧の側面は片方が殻表側（左殻利用の場合は、内面側からみて右側、右殻利用はその逆）、もう一方が殻内側となるが、一般に殻表側はあまり加工せず自然面のまゝ、殻内側は打割、打剥で加工し研磨は施さないことが多い。
- ③ 前面（殻内側平面）は前歯の突起を軽く均らす程度の加工のほかは、概ね自然面のままである。
- ④ 刃部は研磨によって造られる。刃部斜面は必ず前面側（殻内側）につくられる。背面

側（殻表側）は自然の背面のカーブを利用して、これをそのまま刃面としている。研磨はていねいになされるが、背面側は自然のカーブの面を研磨するだけで、形態を変えるほどの研磨は施さない。

⑥ 刃縁は弧状を呈することが多い。

以上の特色から、貝斧胸部の断面形は概ね自然貝のちょうどがい部と同じ形を呈する。底が丸みをもつ三角形に近い。（自然貝の凹凸があるので、厳密には三角形とはい難いが、前面（内側）に山形の稜をもつことが特徴的である。）

刃部を側面からみると、刃縁は軸全体の中心をとおる左右対称形が多い。殻表のカーブがちょうど中心軸と交わるところを刃先（刃縁）にし、その内側にもう一方の側の面を引き出してつくってある。

9個中6個は刃縁が中心軸をとおる対称形で、2個は一方に偏向している。あと1個は刃先を欠くため不明である。

殻表に、タマガイ科によって開孔されたとみられる円形の穴がみられる。

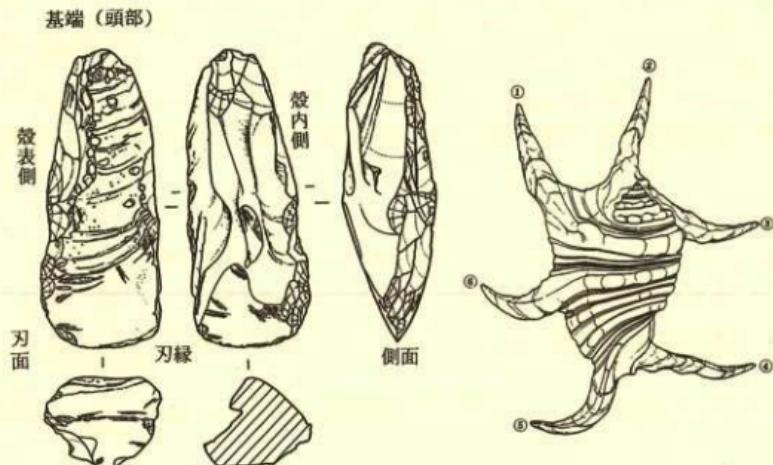


図8 貝斧の部位名称とスイジガイ突起の番号

貝斧觀察表

資料番号	図		9の1	9の2	9の3
	図版		21	22	23
出土地点		掘り返し盛土	掘り返し盛土	掘り返し盛土	
貝種		シャコガイ	シャコガイ	シャコガイ	
利用部位	殻	左殻	左殻	左殻	
	部 分	ちょうつがい部	ちょうつがい部	ちょうつがい部	
計測値	長さ	19.3 cm	20.8 cm	16.3 cm	
	刃部幅	6.0 cm	推測 6.4 cm	4.1 cm	
	基部	胴部中央	6.9 cm	5.9 cm	4.8 cm
	基部	一部欠失、推測 5.0 cm	4.3 cm	4.4 cm	
	厚さ(最大)	4.9 cm	4.3 cm	3.5 cm	
重量(現残存量)		769 g	680 g	425 g	
保存状況		基端一部欠失、刃縁欠失	刃部刃先欠失	完形品	
研磨部位		なし	背面刃部研磨、前面刃部欠失により不明	刃部のみ研磨	
打割、打剥部位		殻内側面、基端	殻内側面、基端	基端、殻内側面	
刃部	刃面	自然の縁辺をそのまま刃部にしている。研磨なし	前面は欠失で不明、背面は研磨	両面研磨 前面側から斜面砥ぎ出し	
	刃角	殻表側の角の一部欠失、殻内側隅丸形	欠失で不明	隅丸角	
	刃縁	一部欠失するが弧状を呈する	欠失	弧状	
	使用痕				
	刃部偏向	一方に偏る。	刃先を欠くが、一方に偏ると推定	中心軸上にあり偏りなし	
基部	殻内側平面(前面)	ちょうつがいの自然形をほぼそのまま残す。	ちょうつがい部の自然面のまま	自然面のまま 主齒をやや欠く	
	殻表側平面(背面)	殻表の自然面をそのまま残す	刃部のほかは自然面のまま	自然面のまま	
	外縁側面	自然面のまま	自然面のまま	自然面のまま	
	殻内側面	打剥により調整	打剥により調整	粗い打割で三つの抉りあり、さらに細かい打剥で調整	
	胴部中央断面	底が丸味をもつ三角形	底が丸味をもつ三角形	やや菱形	
	基端部	一部欠失、ヨコに打割裁断	粗い打割で裁断	打割後細かく敲打し、半球形に仕上げる。	
補足					

貝斧観察表

資料番号	図		9の4	10の1	10の2
	図版		24	25	26
出土地點		掘り返し盛土	掘り返し盛土	掘り返し盛土	
貝種		シャコガイ	シャコガイ	シャコガイ	
利用部位	殻		左殻	左殻	左殻
	部	分	ちょうつかい部	ちょうつかい部	ちょうつかい部
計測値	長さ		15.0 cm	基部上半欠失	12.0 cm
	刃部		4.0 cm	4.6 cm	4.1 cm
	幅部	基部中央	5.1 cm	4.8 cm	3.8 cm
		基端部	3.6 cm	欠失	1.1 cm
	厚さ(最大)		4.5 cm	4.3 cm	3.2 cm
重量(現残存量)		369 g	245 g	190 g	
保存状況		完形品	基部上半欠失	完形品	
研磨部位		刃部のみ研磨	刃部中心、刃部の延長として背面の一部	刃部のみ研磨	
打割、打剥部位		基端、殻内側面	殻内側面、(上半欠失で基端観察不可)	殻内側面、基端	
刃部	刃面	両面研磨 前面から斜面砥ぎ出し	両面研磨 前面から斜面砥ぎ出し	両面研磨 背面からもわずかに砥ぎ出しあり、前面から斜面砥ぎ出し	
	刃角	両側とも角あり	両側あり、角面の稜あり、	あり(使用で一部欠失)	
	刃縁	弧状	弧状	弧状	
	使用痕				
	刃部偏向	偏りなし	偏りなし	偏りなし	
基部	殻内側平面(前面)	自然面のまま	自然面のまま 前面の側面が、刃面砥ぎ出しに伴ないわずかに研磨される	自然面のまま(側面はわずかに研磨)かなり磨耗して滑面多い	
	殻表側平面(背面)	自然面のまま	自然面のまま	自然面のまま	
	外縁側面	自然面のまま	自然面のまま	自然面のまま	
	殻内側面	打剥調整	打剥後、細かく敲打調整	打剥後かなり細かい調整さらにかなり磨耗	
	胸部中央断面	底の丸い三角	三角形	底が丸く片寄った三角形	
	基端部	かんたんな打割	欠失	細くとがる、かんたんな打割、かなり磨耗	
補足					

貝斧観察表

資料番号	図		10の3	10の4	10の5
	図版		27	28	29
出土地点		保存地域試掘トレンチG-1 5、Ⅲ層0-20cm	掘り返し盛土	掘り返し盛土	
貝種		シャコガイ(ヒレジャコ)	シャコガイ	シャコガイ	
利用部位	殻		左殻	右殻	右殻
	部	分	ちょうつかい	ちょうつかい	ちょうつかい部
計測値	長さ		9.6 cm	12.0 cm	上半欠失
	刃幅	一部欠失	4.5 cm(推測)	4.0 cm(推測)一角欠失	
		基部中央	3.1 cm	4.2 cm	3.3 cm
	基端部	1.9 cm	2.2 cm	上半欠失	
	厚さ(最大)	2.5 cm	3.6 cm	2.8 cm	
重量(現残存量)		83 g	218 g	109 g	
保存状況		刃部一部欠失	刃部角一部欠失、 基端一部欠失	上半欠失、刃角一部欠失	
研磨部位		なし(未製品)	刃部のみ研磨	刃部、刃部に続く背面下 半部	
打割、打剥部位		殻内側面、基端	殻内側面、基端	殻内側面(基端欠失)	
刃部	刃面	未製品のため、まだ砥ぎ出しを開始していない。	両面研磨 前面側から斜面砥ぎ出し	両面研磨	
	刃角		あり、片側は欠失	あり、一方の角は欠失	
	刃縁		弧状	弱い弧状	
	使用痕				
	刃部偏向		偏りなし	偏りなし	
基部	脣部	殻内側平面(前面)	自然面のまま	自然面のまま 側歯は刃部研磨に伴ない 研磨を受ける	中央突起帯も研磨
		殻表側平面(背面)	自然面のまま、ヒレも残る	自然面のまま	刃部に続く下半部は研磨
		外縁側面	自然面のまま	自然面のまま	自然面のまま
		殻内側面	打剥	打剥	打剥
		脣部中央断面	底の丸い抉入菱形	三角形	三角形
	基端部	かんたんな打割	かんたんな打割	欠失	
補足					

貝斧觀察表

資料番号	図版	10の6	11の1	
		30のイ	30のロ	
出土地點	保存地域試掘トレンチG-5 重層0-20cm		掘り返し盛土	
貝種	シャコガイ		不明(シャコガイ?)	
利用部位	殻部	不明	不明	
	部分	肋内部	不明	
計測値	長さ	9.0 cm	8.0 cm	
	刃部	2.6 cm	2.5 cm	
	基部	3.4 cm	3.3 cm	
	基礎部	3.3 cm	1.3 cm	
	厚さ(最大)	1.9 cm	1.8 cm	
	重量(現残存量)	85 g	75 g	
保存状況	完形品	完形品		
研磨部位	刃部、殻内側片面のみ研磨	全面研磨、剥離凹面は粗面		
打割、打剥部位	両側角、基礎	全体整形で打割ののち、研磨を施す。		
刃部	刃面	片面研磨、前面・背面が縁辺で交わるところを刃縁(刃先)にする。	両面砥ぎ出し	
	刃角	なし、円形刃	片側あり、片側はなし	
	刃縁	強い弧状	斜刃斧	
	使用痕			
	刃部偏向	偏りなし	やや一方に偏る	
基部	殻内側平面(前面)	両側面角を打剥	打剥凹部を残し、全面研磨	
	殻表面平面(背面)	外層との分離面のまま	打剥凹部を残し、全面研磨	
	外縁側面	側面打剥	側面打剥、敲打	
	殻内側面			
	胸部中央断面	半円形	レンズ状	
基端部	一回打割	打剥、敲打		
補足				

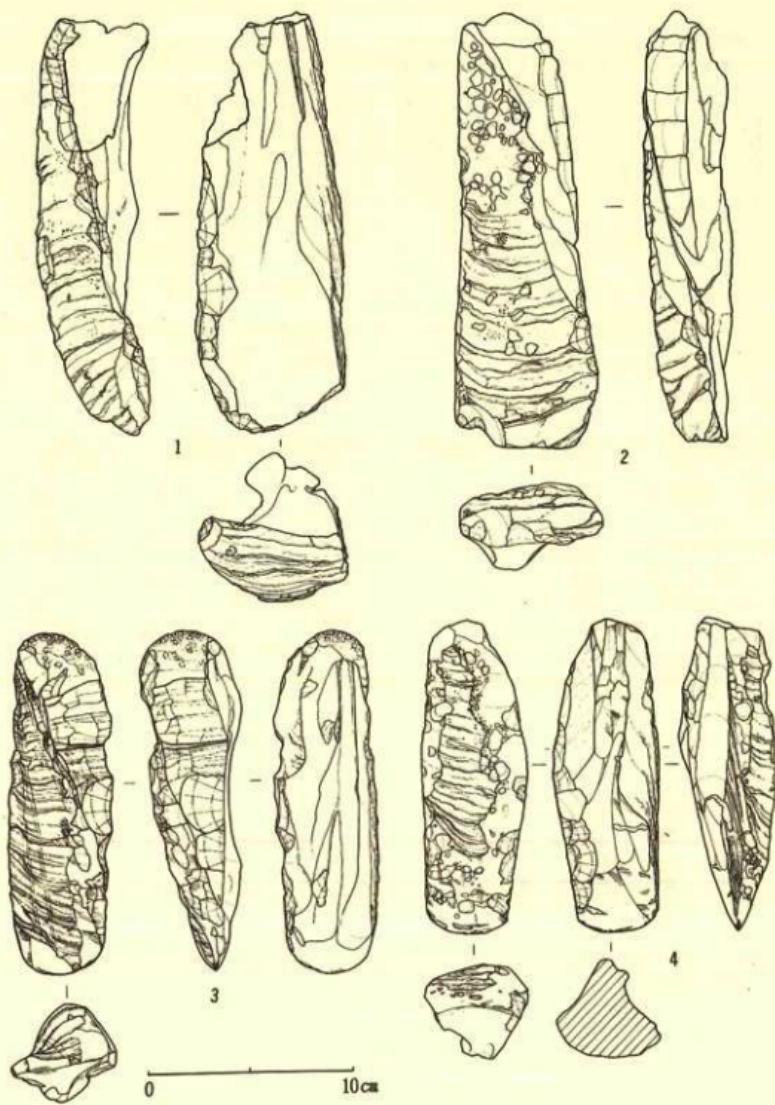


図9 貝斧

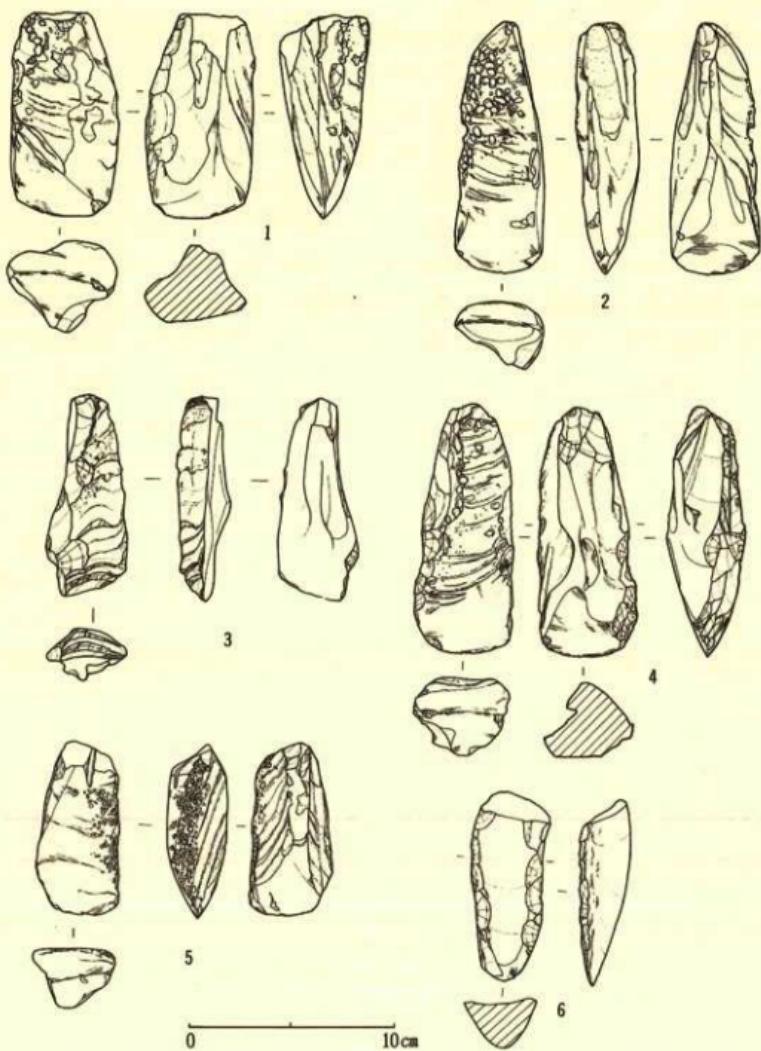


図10 貝斧

(口) 肋部を利用した貝斧

図10の6(図版30のイ)はシャコガイの肋の内層を利用したものである。シャコガイの内面にはギザギザの縫合線の如き線で区画される底面がみられる場合があるが、この内層は殻表との間に分離面をもっている。打割するとこの面があらわれる。

この貝斧はこの内層の肋部を利用したもので、背面は分離面である。殻頂に対して近位端(厚い方)を斧の頭部に、遠位端(うすい方)を刃部にしたものである。断面は丸屋根の三角形を呈する。両側に小刻みの打剥を加え、刃部は内面側からのみ研磨を加えてある。

(ハ) 種不明の貝斧

図11の1(図版30のロ)は貝種を特定できない。厚さからするとシャコガイの可能性がある。素材の全面を加工し、自然面をほとんど残さない。刃部は両面から研ぎ出している。石斧にも類似がみられるような形態である。

(二) 貝斧類似の貝殻片

貝斧に類似するが判別し難いのが2点ある。いずれもシャコガイである。

図11の2(図版31のロ)は左殻のちょうつがい部で細長い。全体に磨耗が著しい。刀先相当部が一部こぼれている。人工品であるとすれば、ちょうつがい部利用型である。

図版31のロは左殻の後背縁(ちょうつがい部の反対側)を利用したものである。前背縁(ちょうつがい部)に比べて直線部が少なく、肋の凹みが縁近くまであって大きな曲面をもつて、斧に利用するにはあまり有効とは思えない。

本標品は打剥のみによって加工され、外縁側を小刻みに剥離して調整している。凹部である脣部半分は欠損している。掘り具を思わせる形態である。重量は250g。

(5) 楕円形貝製品

図11の3(図版32)。二枚貝(種不明)の腹部を打剥によって楕円形に仕上げたものである。加工は周縁にのみ施される。保存地域トレンチG-6Ⅲ層0~20cmの出土である。重量は119g。

(6) ホラガイ腹面有孔製品(688g)

ホラガイの腹面の滑面と螺面との境に孔を穿ったものである。孔は不定形で、周縁に研磨は施されていない。貝はかなりもろくなっていて、外表の一層はところどころ剥離している。外表にわずかにうす茶色を呈する部分があるが、火を受けたか否かの明確な判断は

できない。背面にみられる孔は、後にあいたもので人工のものではない。表面採集。

(7) シャコガイ有孔製品

シラナミの腹部に孔を有するものが 1 個得られた。図11の 4 (図版33のロ)。径 2・3cm のほぼ円形の孔である。孔の周縁は研磨されていない。

(8) スイジガイ付刃突起製品

スイジガイの突起に研磨による加工を施した製品が 4 点得られた。表面採集品のみ。

①番突起に付刃するものが 4 点全部、これにさらに②番突起にも付刃するものが 1 点である。またこのうち体部の背面・腹面とも孔を有しないもの 2 点、との 1 点は背面・腹部ともに大きい孔を有するもの、最後の 1 点は①・⑥・⑥の突起側だけが残存するので不明である。

図12の 1 (図版35) は体部はすべて残存する。突起は②番・④番を根元から欠失し、他も先端部を欠失している。①番突起にのみ加工が施される。腹面側・背面側の両面から刃部を砥き出した平刃 (ヨコ刃) である。刃部側面の研磨はない。背・腹面の打割孔はない。

図11の 6 (図版34) は体部はすべてある。②番突起を根元から欠失し、他の突起は概ね揃っている。①番突起に背・腹両面側から研磨を施し、平刃 (ヨコ刃) に仕上げてある。側面への研磨もていねいになされている。背・腹面の打割孔はない。

図12の 2 (図版36) は体部の半分近くを欠くが、残存状況から背・腹面とも孔を穿たれていたことがうかがえる。突起はいずれも先端を少し欠くが概ね残っている。①番突起にのみ研磨が施されている。腹面側から平たく研磨され、背面側はわずかに研磨される程度である。

図13の 1 (図版37のイ) は、①・⑥・⑥の突起側のみ残り、半分は欠失している。

体部を欠くので、背面・腹面の孔の有無がわからないが、欠損していること自体が、有孔であった可能性を表わしているともいえる。

①番突起と⑥番突起に研磨による付刃がみられる。①番突起は全面から砥き出して円錐形に仕上げてある。⑥番突起も円錐形をなすとみられるが、①番ほどていねいな加工ではなく、また先端を欠失している。

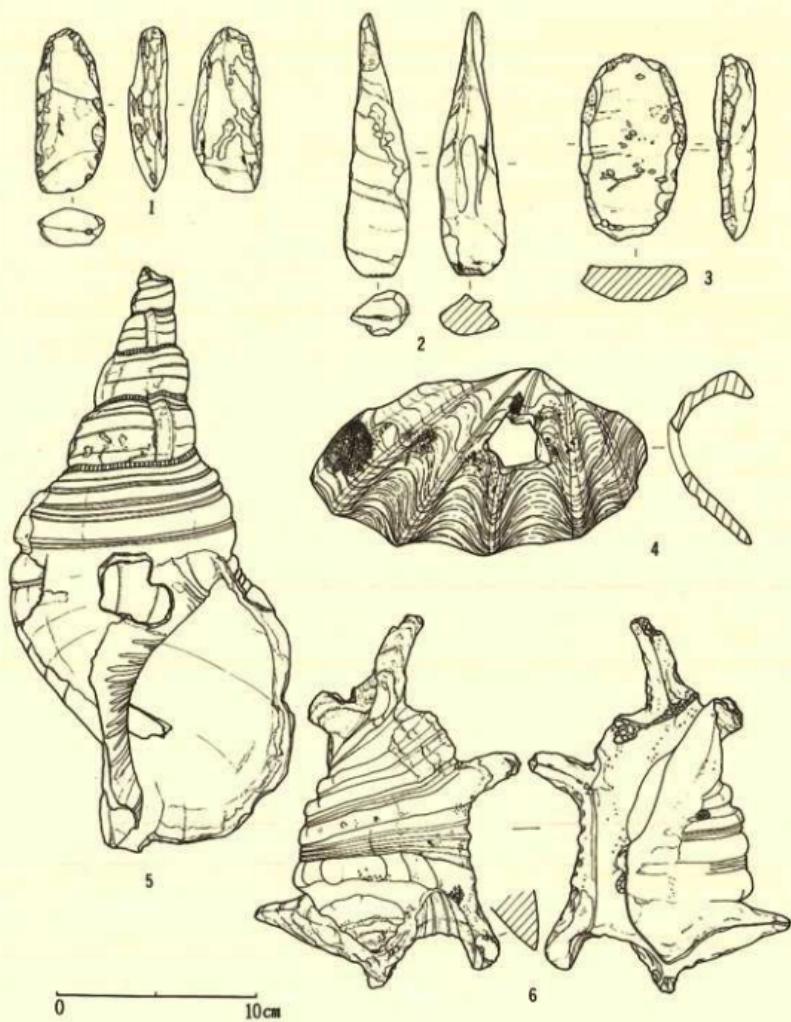
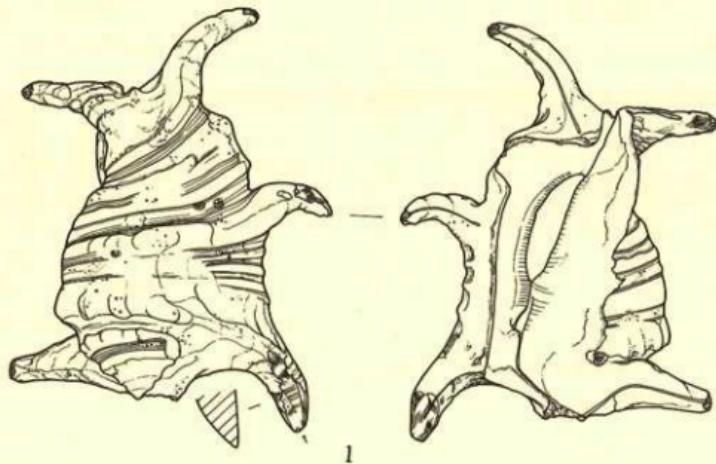
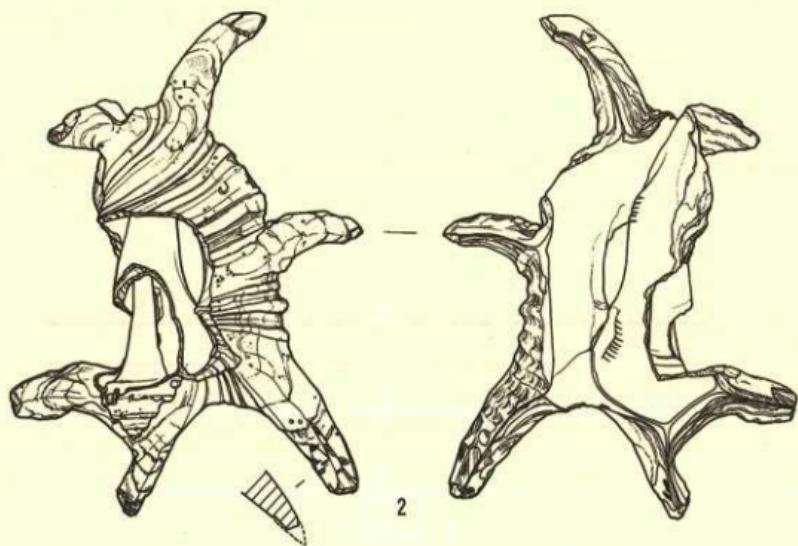


図11 貝斧、橢円形貝製品、シャコガイ有孔製品、ホラガイ腹面有孔製品
スイジガイ付刃突起製品



1



2

図12 スイジガイ付刃突起製品

0 10cm

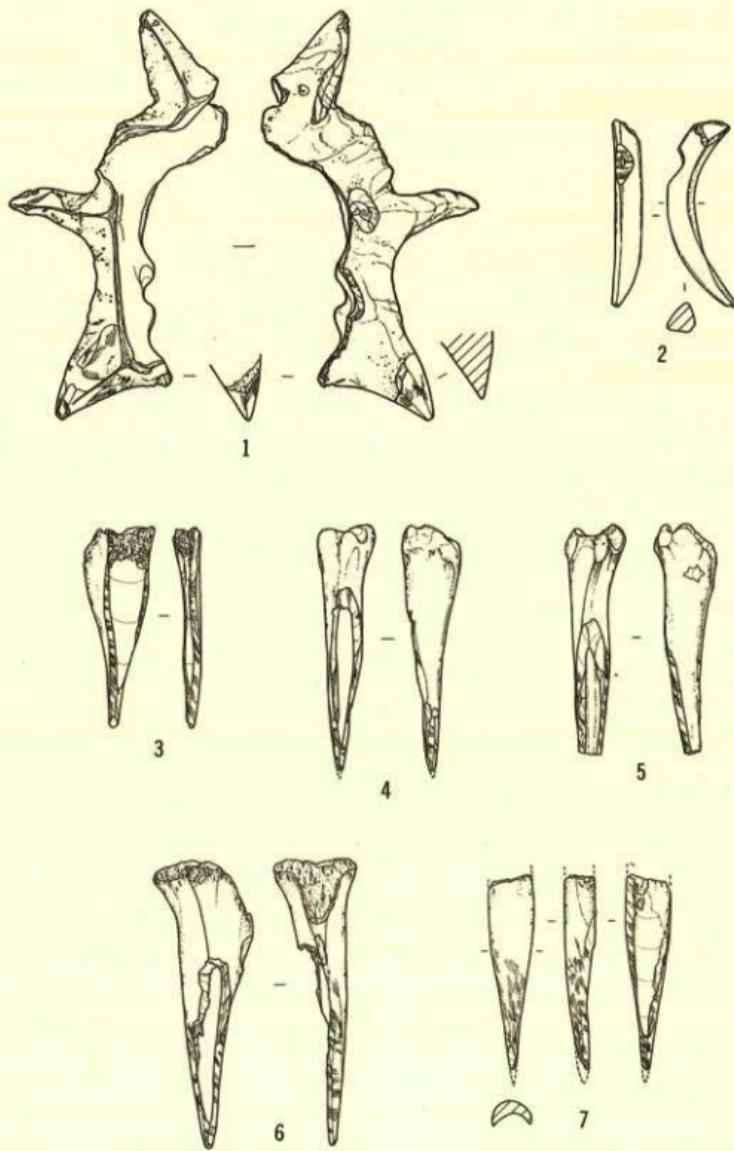


図13 スイジガイ付刀突起製品、猪牙製品、骨錐

0 10cm

(9) 猪牙製品

イノシシの牙を加工したものが1個得られた。図13の2(図版37のロ)。表面採集品。
V字状の切り込みを施したものである。加工面は比較的鋭い。

(10) 骨 製 錐

骨製のキリが5点得られた。図13の3~7(図版38~40)。すべて表面採集品。
イノシシの四肢骨を利用したものである。

図13の3(図版39のロ)は右胫骨の近位端を残し、タテに裂いて加工したものである。
外側が削られている。削り面が稜線をもって先端につづいている。先は尖がる。両側面に斜
方向に条痕が無数についている。製作時のものか、使用痕かはわからない。

図13の4(図版40のイ)は右胫骨の遠位端を残し、内側を削ったものである。かすかに
削り面の稜線を残すが、丸みをもたして先の尖がった形に仕上げてある。先端はわずかに
欠失している。条痕はみられない。

図13の5(図版40のロ)は右胫骨の遠位端を残し、内側を削ったものである。針部の先
半分を欠く。両側破碎面に斜方向に条痕が無数にある。

図13の6(図版41のイ)は左胫骨の遠位端をさいて加工したものである。先へ向かって
丸く削っている。先端をわずかに欠く。側面に斜方向に条痕がみられる。

図13の7(図版41のロ)は右大腿骨の中間部を半截して加工したものである。先端付近
は丸く削り、使用によるとみられる滑面を有する。先端を欠く。根元側にはタテや斜方向
に無数の条痕がみられる。

(II) 土器・陶器

長間底は近世以降農地として利用されてきたようである。具体的な始期は不明である。水田や畠地が存在したが、それは砂丘の上にのっている流入堆積土や、その後風媒で運ばれた最上層の砂地（防潮林に近い側）などで営まれた。

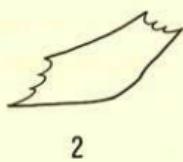
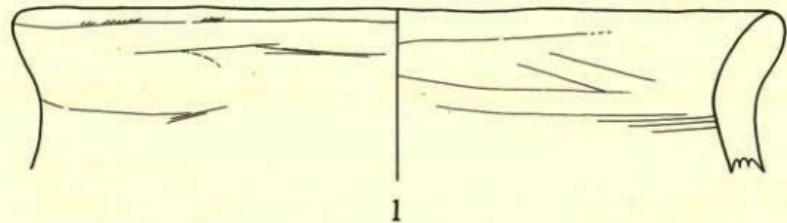
したがって、一帯の表土からは近世以降の遺物も少量ではあるが見受けられる。表面採集で土器や陶器片を採集した。しかしその中に赤褐色で厚く、文様をもつ土器が1個あり、八重山第二期の下田原式土器の文化につながるような文化層の発見の可能性も考えられそうである。

土器①、図14の1・2（図版50のイ・ロ）。宮古の集落跡でよく見られる土器である。赤褐色を呈し、無数の微細な貝殻片を混和材として使用している。焼成はかなり良好である。底部は安定した平底である。口縁部よりみると、短頸の広口壺形土器と、口縁がくの字形に外反する鉢形土器がある。

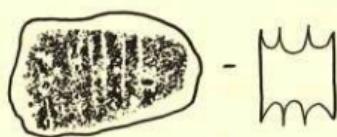
土器②、図14の3（図版50のハ）。これまで宮古で出土例のない土器である。厚さは1.5cmある。外器面は赤褐色を呈し、胎土および内面は黒色である。硬質ではあるが、微粒が剥離する。胎土に長石を多く含む。

器表面に沈線によるヨコ方向の文様が施されている。沈線は複数である。この土器は、八重山第二期の下田原式土器との関わりがないかどうか検討する必要がある。

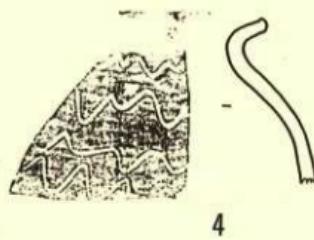
陶器。図14の4・5（図版50の4・5）。素焼の陶器である。球形の壺で、口縁が著しく外反する。内外器面とも灰色を呈し、器胎は茶褐色である。肩部に沈線文を横方向に波状に数条めぐらす。胴部に水の字形の沈線を施す。内器面には無数のタタキが見られる。一見須恵器を思わせるが、別の陶器である。



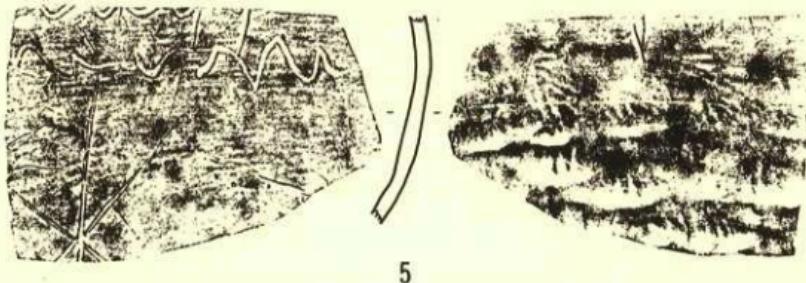
2



3



4



5

図14 土器、陶器

0 10 cm

2 自然遺物

今回の調査では2地域から自然遺物を得た。掘り返し盛土の中に黒色土があり、その中にイノシシの骨が集中的にみられるところがあったのでこれを採集した。掘り返し盛土には貝殻の散布もみられたが採集しなかった。

保存地域については、遺物の出土するⅢ層とその下層のⅣ層から貝殻が出土した。イノシシなどの獸骨は検出できなかった。

(1) 掘り返し盛土の自然遺物

西側地域の掘り返し盛土の中に黒色土があり、その一部に骨の集中しているマウンドが数ヶ所あった。これを掘り返して骨のみを収納した。早稲田大学の金子浩昌氏の同定によれば、イノシシ・ジュゴン・アホウドリ属の鳥類・爬虫類の骨ということである。

イノシシは現在宮古島には棲息していない。このイノシシ骨を含む黒土は石斧の発見された土でもあるが、ほぼ先史時代の所属と考えてよいと思う。そうすると、イノシシは当時宮古島にも自然棲息がみられたのか、それとも石器の石材を石垣島方面から入手したとみられることからして、イノシシも彼地から持ち込んだものかということが問題になる。

(2) 試掘トレンチ出土の自然遺物

自然遺物はⅢ層とⅣ層で得られた。Ⅲ層に最も多い。貝殻とサンゴ石および石材が含まれている。サンゴ石の中には焼石もある。石材は緑色片岩の破片である。石垣島からもちこんだものであろう。焼けたサンゴ石はかなり多量である。焼石調理に用いたものとみられる。獸骨は検出できなかった。

貝はほとんど海産貝で、前面の海に棲息する種である。サラサバテイ、チョウセンザザエ、シャコガイ（シラナミガイ）、クモガイが大部分を占める。やはり前面の礁湖で現在でもよくみられる目であり、当時もよくこれを採取したのであろう。

貝殻の中には孔をもつものがかなり存在した。人間が開孔したものであることは確かであるが、貝を素材とした製品を作るためのものではなく、肉採取のためのものと考えられる。チョウセンザザエ、クモガイ、サラサバテイが多い。

表1 長闊底遺跡掘り返し盛土出土の鳥歯骨

イノシシ	肩甲骨		上腕骨		前腕骨		中手骨		瓦骨		掌骨		手骨		大指骨		下指骨		足指骨		脛骨		中足骨		
	頭面	側	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	
完全骨 (近位端～遠位端)																									
近位端～遠位端 (骨端はすれ)																									
近位端 (骨端はすれ) ～遠位端																									
近位端 (骨端はすれ) ～遠位端 (骨端はすれ)																									
近位端 (骨端欠損) ～																									
近位端 (骨端欠損) ～																									
～遠位端																									
～遠位端 (骨端はすれ)																									
～遠位端 (骨端欠損)																									
哺乳類																									
中間部																									
遠位節骨端																									
ジエゴン																									
アホウドリ類																									
飛虫類																									

表2. 保存地域試掘トレンチ出土貝類

No.	貝類	F - 5 目録						F - 6 目録										
		0 - 20		20 - 40		小計		0 - 20		20 - 40		小計						
		完形貝 有殻頭貝	片 重 量															
		左/右	左/右	(g)														
1	ニシキウズガイ	2		80				2	80				30			30		
2	ギンタカハマガイ	3		220				3	220	3		206			3	206		
3	サラサバティ	146	33	20,970	33	10	4,316	222	25,286	47	4	7,270	17		1,845	68	9,115	
4-5	チョウセンサンザエ	54	31	8,095	13	8	1,540	106	9,575	21	26	4,270	14	11	2,000	72	6,220	
4-6	+	直																
5	ニシキアマオブネ											1	1		1	1		
6	アマオブネガイ					1		1	1	1								
7	オニノゾノガイ																	
8	マガキガイ										1	30			1	30		
9	クモガイ	7	1,310		1	100	8	1,410		1	365			185	1	560		
10	スイジガイ																	
11	ラクダガイ										△	100			△	100		
12	イモガイ科の幼貝																	
13	ホシダカラ	1	40					1	40		1	100			1	100		
14	ヤキシマダカラ																	
15	ホラガイ	△	180					△	180									
16	ミヤコボラ																	
17	ツメレイシガイ																	
18	シラクモガイ	1	70					1	70									
19	イトマキボラ	1	80	1	1	110	3	190		1	130	1	60	2	190			
20	ヒメイトマキボラ	△	200					△	200									
21	イモガイ科	1	45					1	45									
22	アンボンテロザメ	1	70					1	70									
23	クロフキドキ	1	65			△ 10	1	75										
24	リュウキュウサンゴガイ																	
25	シレナシジミ																	
26	シラナミガイ	9	4,820	1		415	10	4,925	1	1	1,280	2		230	4	1,510		
27	ヒレジコ	3	1,035			3	1,035			△	150		△	60	△	250		
28	ヒメジコ	△	110			△	110	1			50			1	50			
29	オオジコ	△	1,300			△	1,300			△	195			△	195			
30	シコゴウ					△ 1,020	△	1,020		△	370			△	370			
31	チョウセンハマグリ																	
32	イソハマグリ																	
33	リュウキュウアヌスガイ					1		5	1	5	1		10		△ 10	1	20	
34	サメザラガイ		1	10				1	10									
35	ツツマイマイ螺					1		2	1	2								
36	ソダガイ科																	
37	イモガイ科	△	490					△	490		△	1,220			△	1,220		
38	シャコガイ科	△	90		△	30	△	120		△	60		△	20	△	80		
	計		36,920			7,548	366	46,468			15,966			4,410	156	20,376		

品種	G - 5 Ⅲ期						G - 6 Ⅲ期						H - 5 Ⅲ期						
	0 - 20		20 - 40		小計		0 - 20		20 - 40		小計		0 - 20		20 - 40		小計		
	実用 育成 片 重数																		
左/右 左/右 (g)	左/右 左/右 (g)	左/右 左/右 (g)	左/右 左/右 (g)	左/右 左/右 (g)	左/右 左/右 (g)	左/右 左/右 (g)	左/右 左/右 (g)	左/右 左/右 (g)	左/右 左/右 (g)	左/右 左/右 (g)	左/右 左/右 (g)	左/右 左/右 (g)	左/右 左/右 (g)	左/右 左/右 (g)	左/右 左/右 (g)	左/右 左/右 (g)	左/右 左/右 (g)		
個数	個数	個数	個数	個数	個数	個数	個数	個数	個数	個数	個数	個数	個数	個数	個数	個数	個数	個数	
重数(g)	重数(g)	重数(g)	重数(g)	重数(g)	重数(g)	重数(g)	重数(g)	重数(g)	重数(g)	重数(g)	重数(g)	重数(g)	重数(g)	重数(g)	重数(g)	重数(g)	重数(g)	重数(g)	
1 ニシキウズガイ			1	50	1	50	1	85	1	25	1	30	2	56					
2 ギンタカハマガイ								△	15										
3 サラサバティ	126	18	23,645	21	4	3,100	171	26,745	19	3,340	38	6	8,530	28	5	4,755	77	13,285	
4-a チュウセンサザエ	39	38	6,595	26	12	3,500	115	10,095	18	7	2,670	51	17	6,250	14	16	2,595	98	8,845
4-b	"	■																	
5 ニシキアマオブネ																			
6 アマオブネガイ																			
7 オニツノガガイ	1		70			1	70							1	50	1	50		
8 マガキガイ															1	1	70	2	
9 クモガガイ	5	1,265	△	40	5	1,305		1	370	3	5	1,210		2	890	10	2,100		
10 スイジガイ																			
11 ラクダガイ																			
12 イモガイ科の幼虫																			
13 ホシダカラ	2	100			2	100	1	20						1	110	1	110		
14 ヤクシマダカラ																			
15 ホタガイ																			
16 ミヤコボラ	1	140			1	140				1	180			1	180				
17 フノレイシガイ																			
18 シラタキガイ	1		40		1	40				1	50			1	50				
19 イトマキボラ														1	130	1	130		
20 ヒメイトマキボラ	1	40			1	40				1	30	1		1	30	2	192		
21 イモガイ科																			
22 アンボンクロザメ			40		△	40	1	70											
23 クロフモドキ									△	70				△	70				
24 リュウキュウサルボウガイ		1	30	1	30	1	35												
25 シンナシジミ										1	20			1	20				
26 シラナミガイ	2/5	1	1,845	△	40	5	1,885	1	1,210	11/7	2	4,035	1/5	1/5	2,145	14	6,180		
27 ヒレジヤコ	1/1	1	1,310			1	1,310			1	2,720	5		275	3	2,995			
28 ヒメジヤコ	1/1	60			1	60													
29 オオジヤコ					△	400	△	400		△	500			△	500				
30 シナヅウ	2/1	1,320			2	1,320	1/1	320	2/1	1/1	5,120			3	5,120				
31 チュウセンハマグリ																			
32 イソハマグリ										1	1			1	1	1	1		
33 リュウキュウマスガガイ										1	10			1	10				
34 サメザラガイ		△	20		△	20				1	25	1		20	2	45			
35 アツマイマイ							2		10										
シダガイ科																			
イモガイ科										△	50			△	50				
シココガイ科		△	220		△	220				△	110			△	110	△	630		
不 明		△	35		△	35				△	30			△	30	△	60		
計			36,745			7,180	308	43,935	42	11	8,145			29,035		11,712	221	40,745	

No	品種	H - 6								合計			備考	
		0 - 20		20 - 40		40 - 60		60 - 80						
		完形目 有根頂片	重量(g)	完形目 有根頂片	重量(g)	完形目 有根頂片	重量(g)	完形目 有根頂片	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	
		左/右	左/右	左/右	左/右	左/右	左/右	左/右	左/右	個数	重量(g)	個数	重量(g)	
1	ニシキウズガイ	1		78	1		30	2	105	8	408			
2	ギンタカハマガイ	2		105				2	105	8	545			
3	サラサバティ	156	27	24,386	27	7	4,260	216	26,535	773	106,305			
4-8	チョウセンサザエ	121	31	13,810	16	2	1,775	170	15,395	596	52,840			
4-b	ニシキアマオヅキ	①		10				①	10	1	10			
5	ニシキアマオヅキ	1		5				1	5	2	6			
6	アマオヅキガイ									1	1			
7	オニノツノガイ	1		30				1	30	3	150			
8	ワガキガイ	1	1	50				2	50	5	150			
9	タモガイ	1	8	1,710		△	70	9	1,780	34	7,515			
10	スイジガイ													
11	タクダガイ	△	150					△	150	△	340	△即は軟体部の出土なし		
12	イモガイ科の幼虫	1	35					1	35	1	35			
13	ホシダカラ	8	410		△	80	8	400	14	860				
14	ヤクシマダカラ													
15	ホラガイ	△	35		△	1	△	35	△	216				
16	ヒヤコガイ									2	220			
17	ツノレイシガイ													
18	シラクモガイ									3	150			
19	イトマキボラ				1	20	1	20	7	530				
20	ヒメイトマキボラ	△	70					△	70	3	502			
21	イモガイ科									1	45			
22	アンボンクロゾメ									2	180			
23	クロフモドキ									1	145			
24	リュウキュウサルボウガイ									2	65	2枚目は左右の多い方を最小個体数とした		
25	シレナシジミ									1	20			
26	シラナミガイ	14 5	3	8,035	2 2		770	16	9,405	50	25,125			
27	ヒレジャコ	1 2	1	2,360		△	510	2	2,870	9	8,460			
28	ヒメジャコ	2 1	1	235				2	235	4	455			
29	オオジャコ	△	250					△	250	△	2,645			
30	シャゴウ	△	1,025	1		1,365	1	2,390	7	10,445				
31	チョウセンハマグリ	1		70				1	70	1	70			
32	イソハマグリ									1	1			
33	リュウキュウマスオガイ									3	35			
34	サメザラガイ									3	75			
35	アツマイマイ類									3	12			
	ソデガイ科	△	105					△	105	△	105			
	イモガイ科	△	50		△	250	△	300	△	2,860				
	シャコガイ科	△	110					△	110	△	425			
	不明													
	計			53,513			9,021	435	62,534	1,538	222,196			

No	具 種	P - 5		P - 6		G - 5		G - 6		H - 5		H - 6		合 計			
		IV 層		V 層		IV 層		IV 層		IV 層		V 層					
		完形具 成 度	片 重														
1	ニシキウズガイ			1	10	1	30								2	40	
2	ギンタカハマガ																
3	サラサバティ	2	1	180	3	2	450	6	900	2	4	335	12	3	3,920	5	
4-a	チョウセンザエ	14	4	1,170	21	2	1,340	4	5	600	4	4	490	1	2	180	1
4-b	ニシキアマオブネ																
5	アマオブネガイ																
7	オニノフノガイ														1	170	
8	マガキガイ																
9	タモガイ	1		60								4	800		5	860	
10	スイワガイ					1	370								1	370	
11	タタダガイ																
12	イモガイ科の幼虫																
13	ホシグラカ											△	35		△	35	
14	ヤクシマダカラ	1		30											1	30	
15	ホラガイ																
16	ミヤコガラ																
17	ツノレイシガイ			1	30										1	30	
18	シラクモガイ																
19	イトマキボラ																
20	ヒメイトマキボラ																
21	イモガイ科																
22	アンボンクロザメ																
23	クロフモドキ																
24	リュウキュウガ																
25	シレナシジミ																
26	シラナミガイ											△	55		△	55	
27	ヒレジコ											△	1,270		△	1,270	
28	ヒメジコ																
29	オオジコ	△	240												△	240	
30	シヤゴウ					1	1,030								1	1,030	
31	チョウセンハマグリ																
32	イソハマグリ																
33	リュウキュウマスキガ																
34	サメザラガイ																
35	アフマイマイ	△	1												△	1	
	シダガイ科																
	イモガイ科																
	シャコガイ科	△	240									△	35		△	275	
	不明																
	計	18	5	1,921	25	5	1,830	12	6	2,930	6	8	860	13	9	6,260	6
																1	955
																114	14,756

表3 試掘トレントンⅢ層の有孔貝出土状況

番号	グリッド名	F - 5				F - 6				G - 5				G - 6			
		第Ⅲ層		第Ⅲ層		第Ⅲ層		第Ⅲ層		第Ⅲ層		第Ⅲ層		第Ⅲ層		第Ⅲ層	
		層序	レベル	0~20cm	20~40cm												
3	サラサバテイ			1	50	1	90			2	150					1	150
4-a	チョウセンサンザエ	21	1550	4	280	13	1100	2	160	39	3340	6	430			11	900
8	マガキガイ															4	490
9	クモガイ	4	370	1	20	3	370	1	90	14	1960	3	230				
10	スイジガイ																
13	ホシダカラ	2	150							6	390						
18	シラクモガイ																
20	ヒメイトマキボラ	1	80			1	50	1	100				2	150			
26	シラナミガイ																
27	ヒレジヤコ																
	計	28	2150	7	400	18	1660	3	250	63	6040	11	810			17	1620

番号	グリッド名	H - 5				H - 6				計				
		第Ⅲ層		第Ⅲ層										
		層序	レベル	0~20cm	20~40cm	0~20cm	20~40cm							
3	サラサバテイ	8	680	7	680	6	750	2	200	28	2750			
4-a	チョウセンサンザエ	26	1830	16	1080	33	2720	12	820	183	14210			
8	マガキガイ			2	30	1	10			3	40			
9	クモガイ	7	970	6	680	5	540			48	5720			
10	スイジガイ			1	230					1	230			
13	ホシダカラ			3	150	4	290			15	980			
18	シラクモガイ	1	80							1	80			
20	ヒメイトマキボラ			2	130			2	120	7	480			
26	シラナミガイ	1	110			1/2	730	1/3	610	4/9	1880			
27	ヒレジヤコ	4	355							4	355			
	計	47	4025	37	2980	52	5040	20	1750	303	26725			

おわりに

長間底遺跡は宮古島における最初の先史（原始）時代遺跡であったが、そもそも発見の契機自体が採砂工事に伴うものであり、ある程度の破壊が既に進んでいた。その後の分布調査においても、この遺跡の性格が飛地状の地点貝塚の分布であることを把握できず、結果的にはかなりの地域の採砂工事によって掘り返された土砂の中に、地点貝塚の残影を見ることとなってしまった。このような立地条件の遺跡においてはこのことを教訓とし、サンプリングによる試掘によっては適確な遺跡の範囲・層の有無の把握は困難であることを十分認識すべきである。分布調査で確認できた保存地域だけはひきつづき保存されることになった。

掘り返し盛土はまだすべてについて検出を終えたわけではない。幸いこの土砂は再び敷きつめられたので、将来再検出作業を行う道は残されている。ただ前述したように地点貝塚であるため、遺物の得られる率はきわめて低い。しかし場所を特定できないため、全面について発掘をする必要がある。かなりの期間と労力を要することであろう。

さて、得られた考古資料は注目すべき内容をもつものが多い。

シャコガイ製貝斧は八重山地域のそれに共通し、さらにはフィリピンにまで広いつながらをもつとみられるものである。これによって「ちょうつがい部利用型」の文化圏であることはいっそう明確になったといえる。今後宮古・八重山地域で発見されるシャコガイ製貝斧はやはり「ちょうつがい部利用型」がほとんどを占めることが予想される。

一方でシャコガイの肋の内唇を剥離してつくった貝斧や、全面を研磨して石斧の如く仕上げた貝斧が存在することも注目される。「ちょうつがい部」を主流としつつも、ある程度の多様性をもっているといえる。そしてその多様性は宮古島で生み出されたものなのか、他地域と関わるものであるかについても検討していく必要がある。

スイジガイ付刃突起製品は南島に広く分布する。沖縄本島圏のそれと、宮古・八重山圏のものとはとくに際立った相違はない。その系譜は一元的であるかの如く見える。しかし物質文化全体を比較した場合、やはりその相違は顕著であるといわざるを得ない。先史時代における両地域の交渉の有無を考える上で、スイジガイ付刃突起製品は重要な位置を与えられているといえる。

石斧は八重山圏のものと類似する。とくに局部磨製、片刃、平面長方形という要素は強い関連をもつてゐる。石材も八重山より入手したものであろう。

土器を伴わない点もまた八重山Ⅰ期の重要な性格のひとつである。本当に全く土器を伴わないのだろうかという論議もあるが、攪乱ながら大規模な長間底の掘り返し土砂を観察してもまだ発見できないのであるから、やはり無土器であると考えられる。

そしてそれは大量に包含層から出土した焼けたサンゴ石の理解ともかかわってくる。このサンゴ石は焼石調理に用いられたものであろう。遺跡地から得られた白いサンゴ石（焼けてないもの）を焼き火で焼いてみたが、煮沸実験でも挙大のものの5個程度で約5ℓの水を瞬時に沸騰させることができた。蒸し焼きなど他の方法でも十分有効な熱をもち得るものである。焼けた後の状態をみると、包含層出土の焼石と全く同じ状態の石に変化していく。

この遺跡が土器を伴わないのは、焼石調理法の存在によってとくに土器を必要としていなかったことが主な要因とみられる。

骨製錐はⅠ期の遺跡ではおそらく明確な共伴例はない。本遺跡についても共伴が認められたわけではないが、他の時期の層が発見されない以上、やはり共伴する可能性の大きいものとして含めておきたい。

この骨製錐の素材も含めてイノシシの骨が出土していることは興味深い。周知のように宮古島にはイノシシは棲息していない。八重山からもち込んだものであろうか。あるいはかつては棲息していたのであろうか。今のところは持ち込みの可能性が大きいように思われる。しかし類例遺跡の増加によっては後者の可能性も検討すべきであろう。

長間底遺跡の発見は、これまでかなり新しく考えられていた宮古島の歴史を、はるか原始時代にまで遡らせるのこととなった。それは沖縄本島で縄文後期から始まるとされていた新石器時代が、渡具知東原遺跡の発見で（実質的にはヤブチ洞穴の発見が古いのだが）爪形文土器文化の時期まで遡ったことと似ている。

このことは、あらゆる可能性を想定すべきであることを示している。今後も、宮古島において従来の既成概念を越えるような発見— 例えば八重山第Ⅱ期の文化の存在 — が全くないとはいえないであろう。

また、宮古においても砂丘地遺跡の存在を示したこととは、今後このような環境の地形に十分注意すべきであることも示している。

埋蔵文化財のとり扱い上の姿勢としても、開発計画等の策定にあたる場合の姿勢としても上記の2点をふまえ、遺跡を安易に破壊することのないよう配慮することが求められている。



図版1. 発見当時の長間底遺跡（1981年）

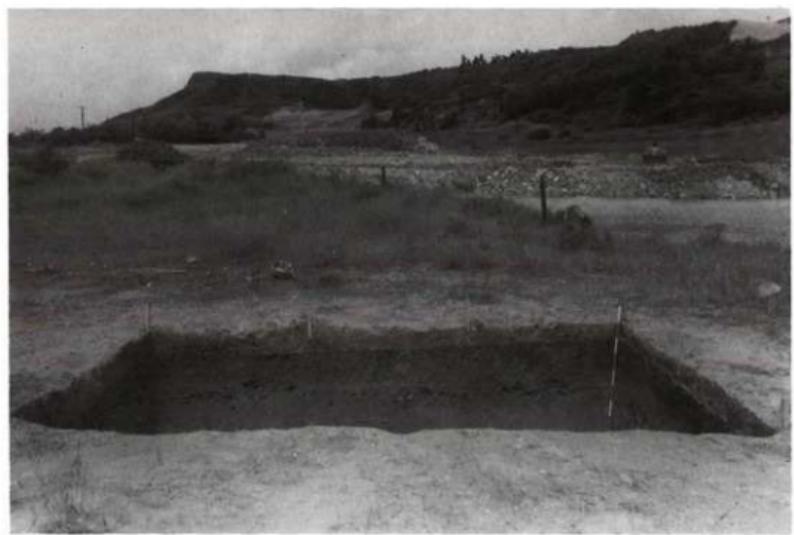


図版2. 上、後背丘西側より長間底をのぞむ
下、後背丘東側より長間底をのぞむ



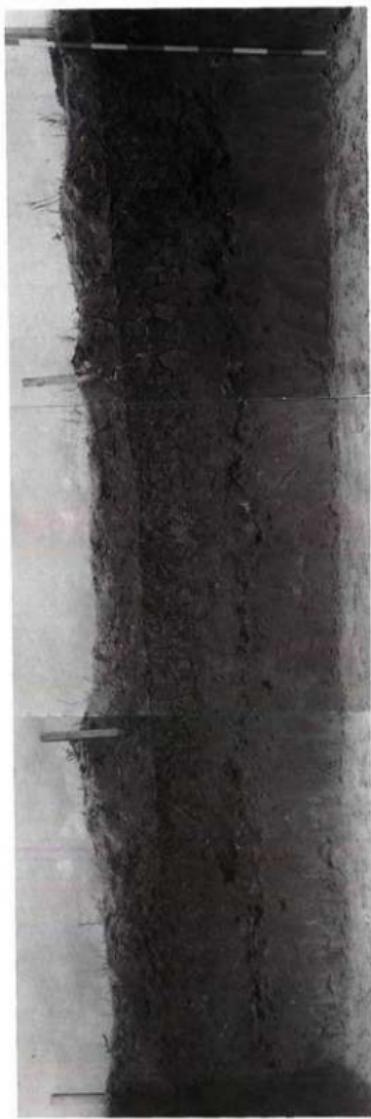
図版3. 上、東側地域

下、保存地域（池脇の穴は試掘地点）



図版4. 上、西側より長間底をのぞむ
下、保存地域試掘トレンチ（西側よりみる）

図版5. 保存地域 試掘トレーンチ、上…東壁、下…南壁



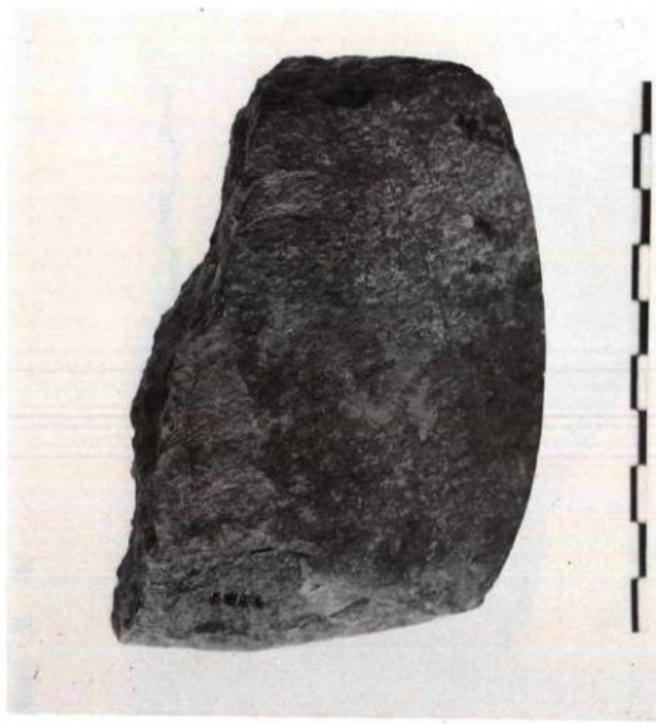
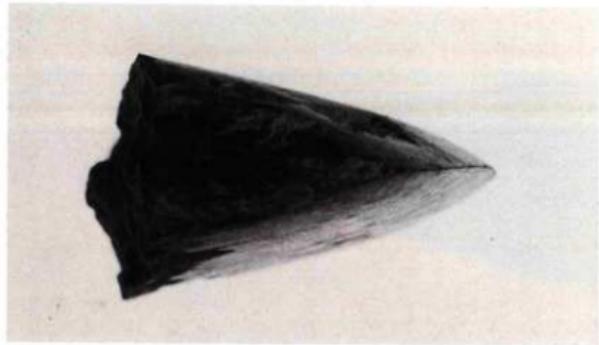


図版6. 発掘状況 上、試掘トレンチ、下、西側地域盛土

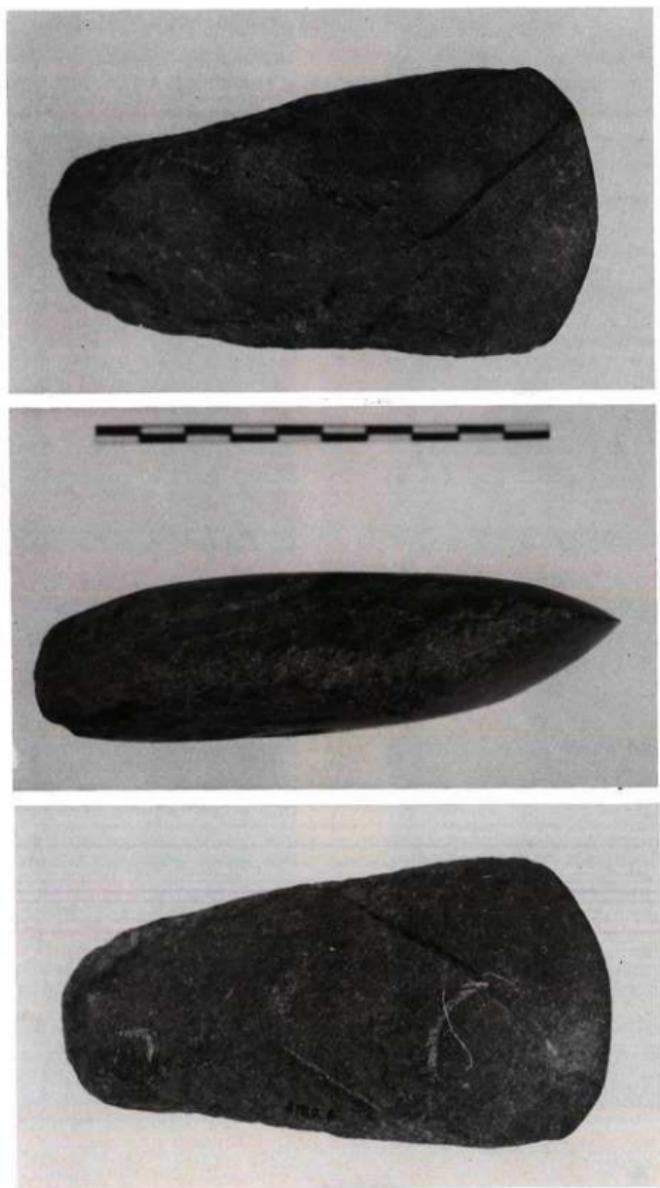
圖版 7. 石斧



圖版 8、石斧

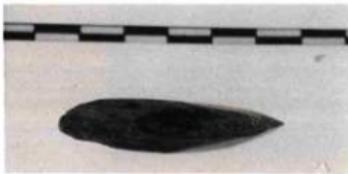


圖版 9. 石 斧





圖版 10. 石斧

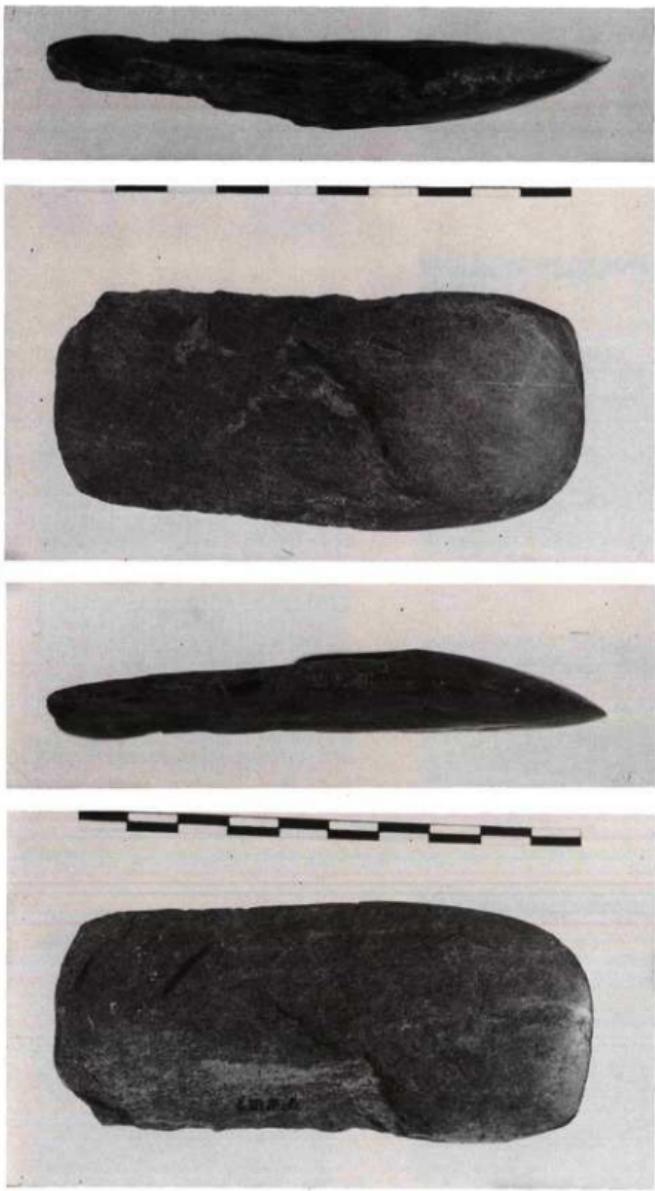


圖版 11. 石 箭

▲

□

圖版12. 石 斧

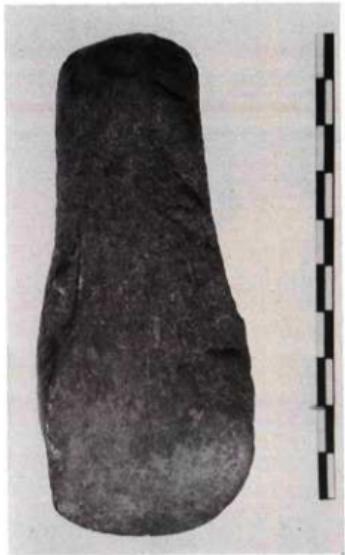




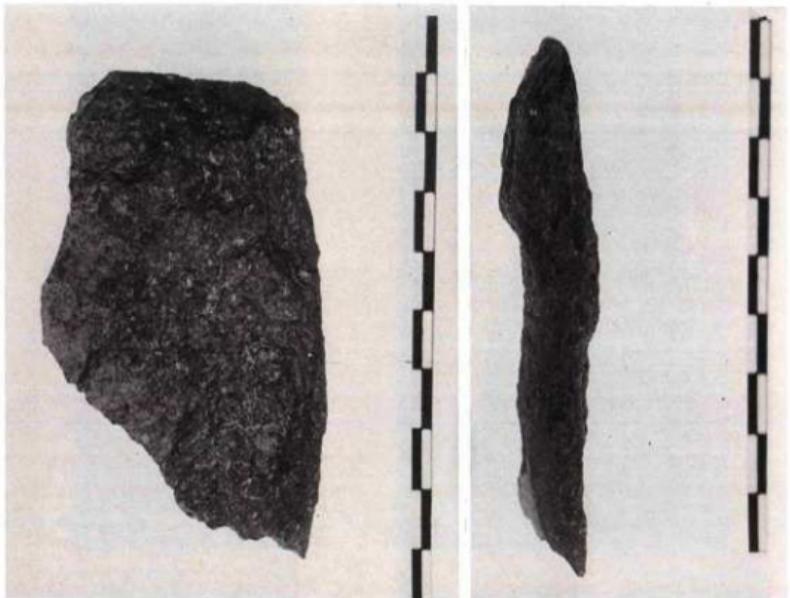
図版 13. 石 斧



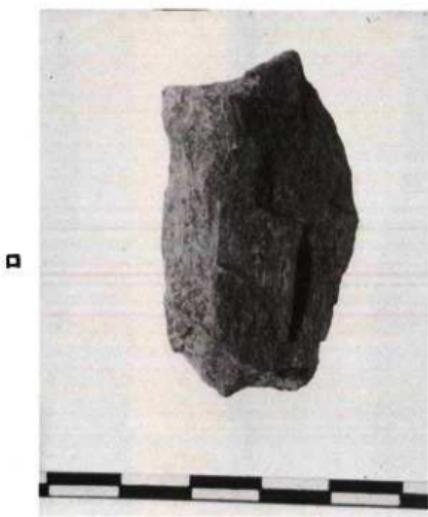
図版 14. 石斧



圖版 15. 石斧

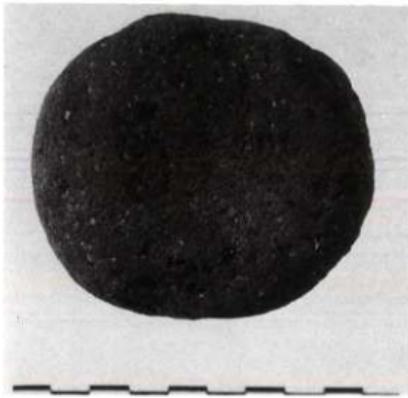
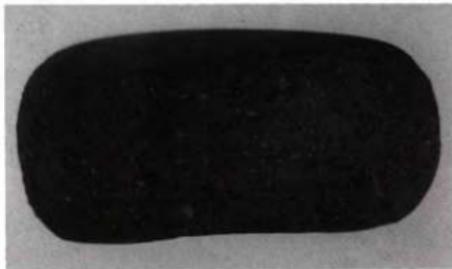


イ



ロ

図版16. 石斧の破片とみられるもの

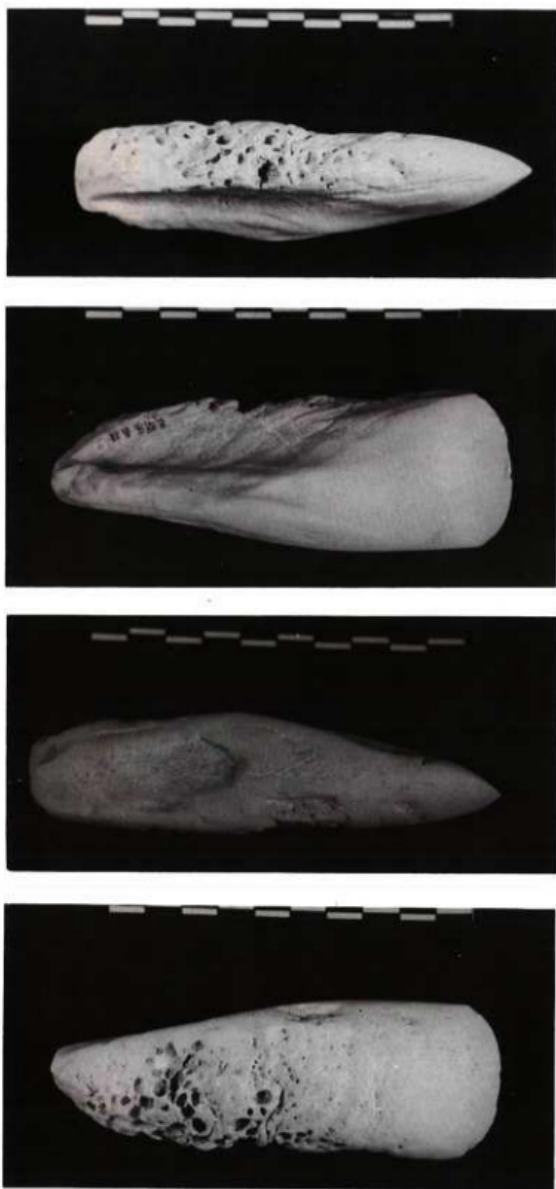


圖版 17. 磨石

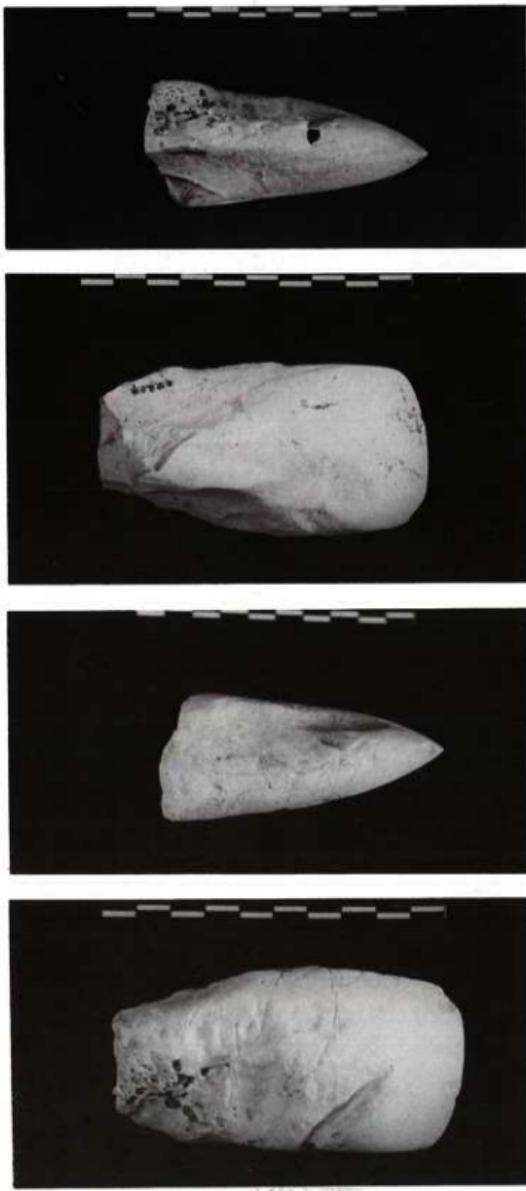


國版 18. 敝 石

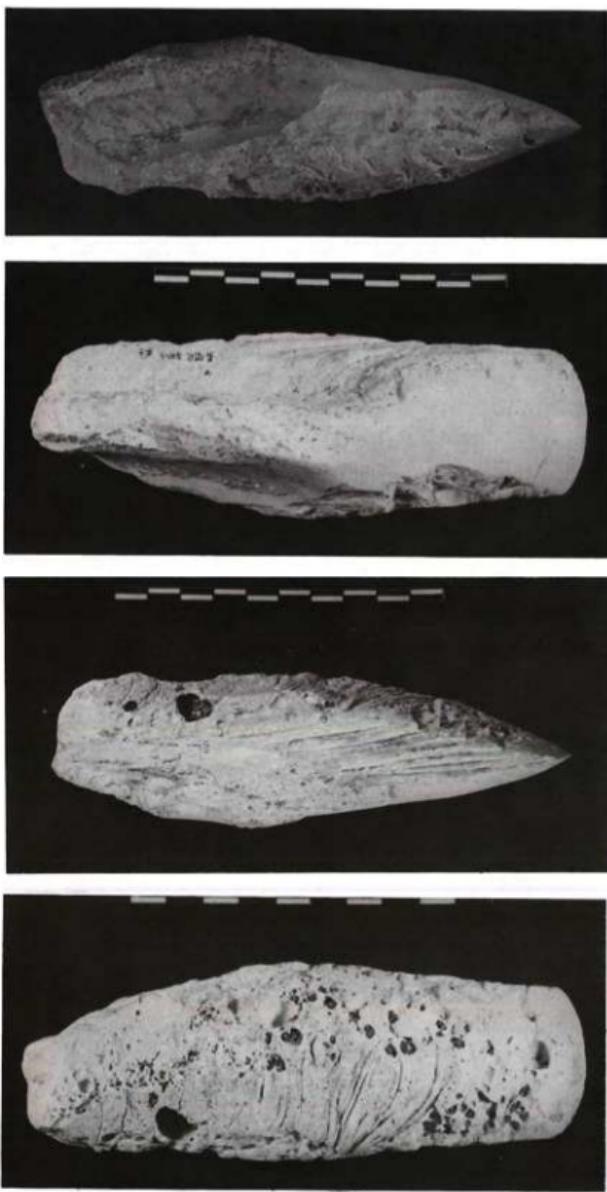
圖版 26. 貝斧



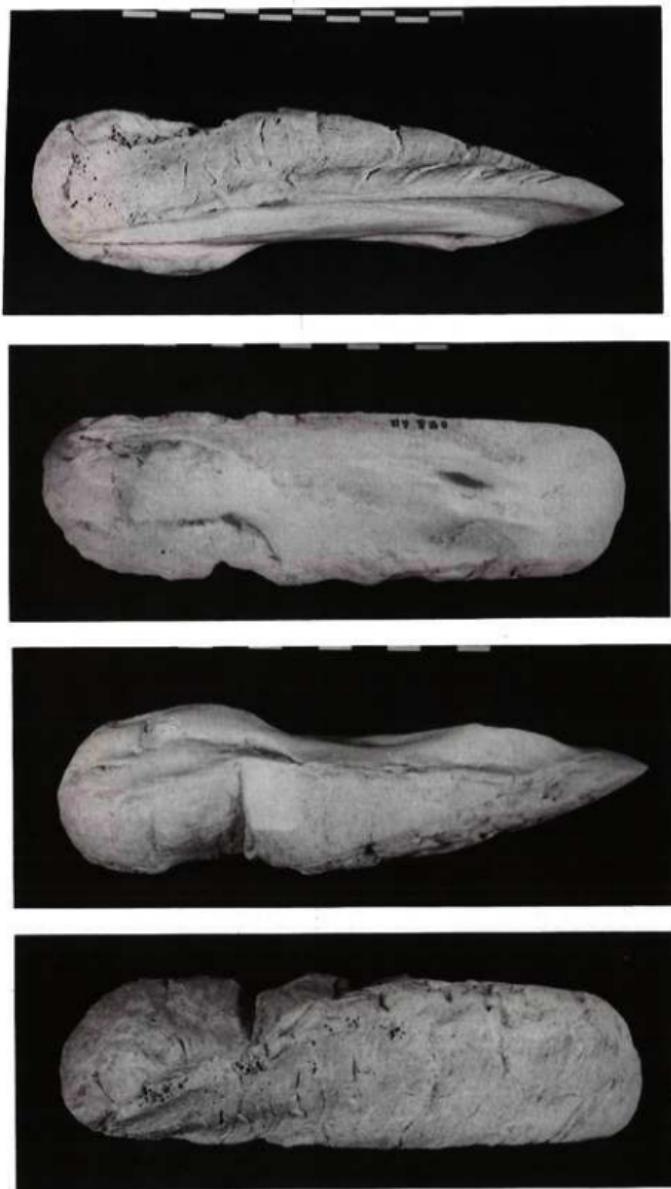
圖版25. 墓斧



圖版24. 舟



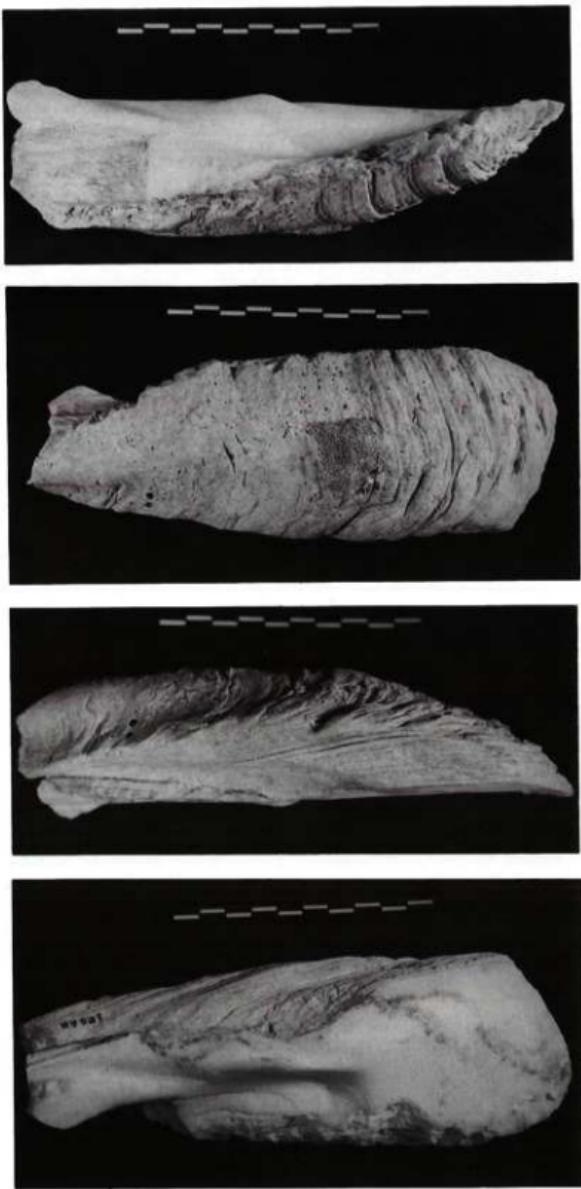
圖版 23. 具斧



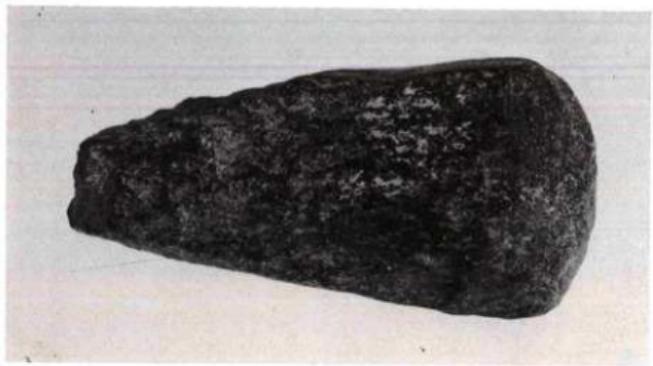
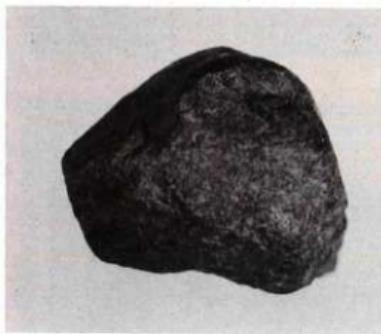
圖版22. 貝斧

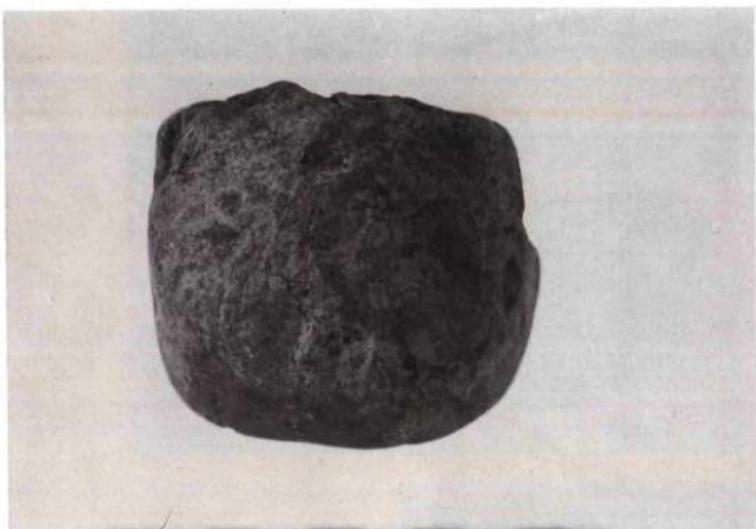


圖版 21. 貝 壳



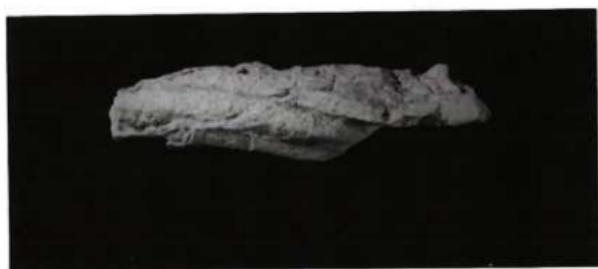
圖版 20. 石

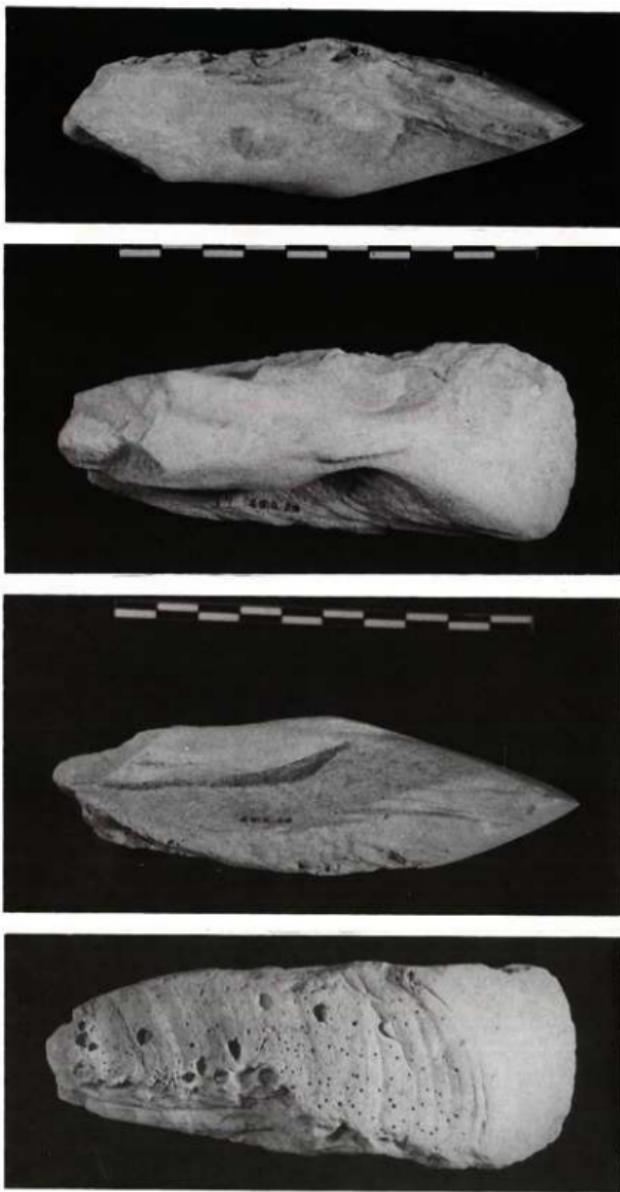




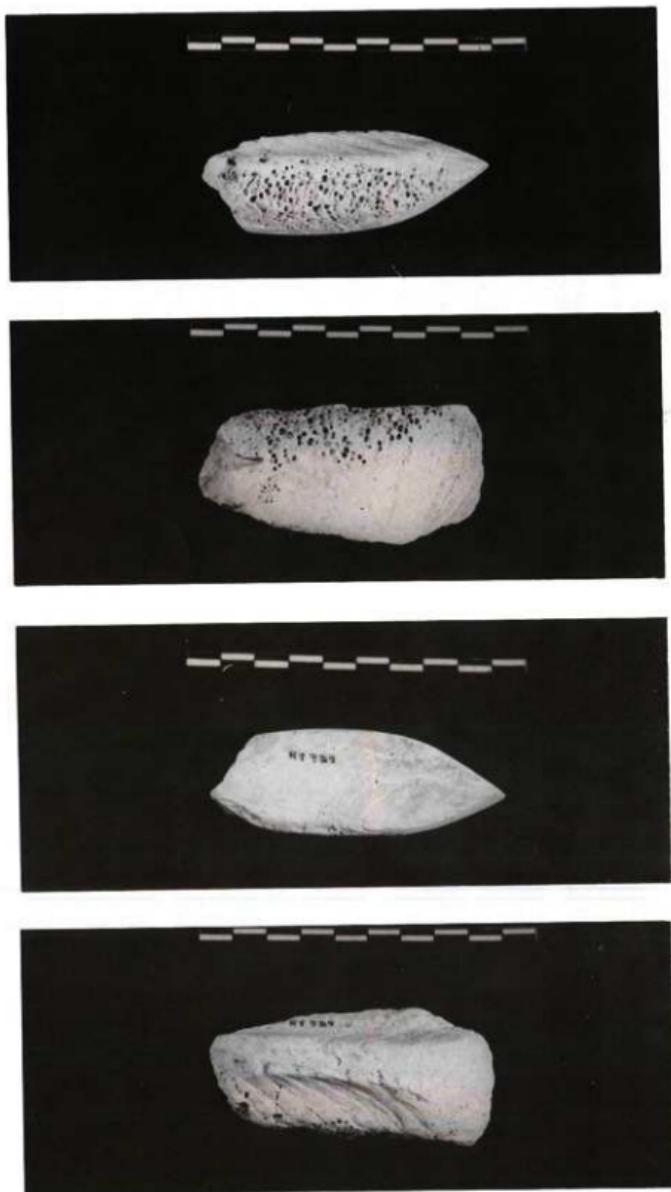
図版19. 砖 石

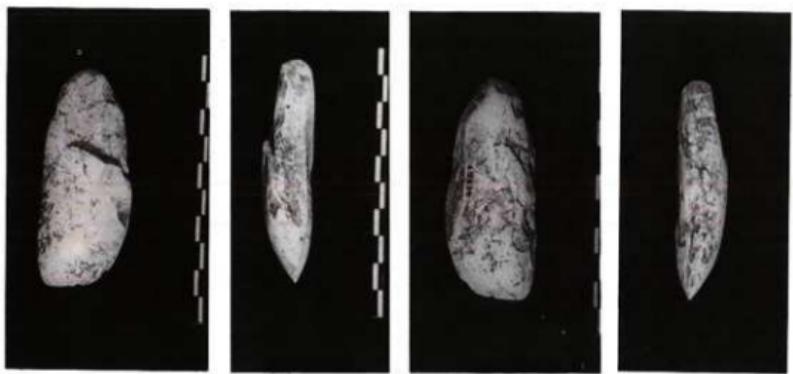
圖版27. 貝斧



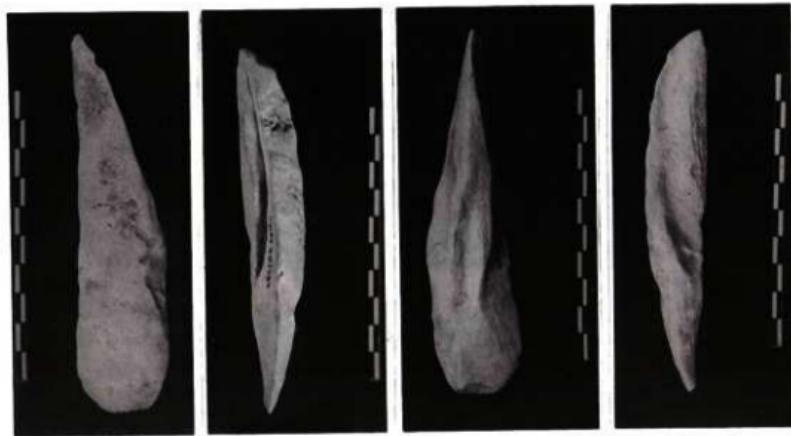


圖版29. 貝斧





図版30. 貝斧



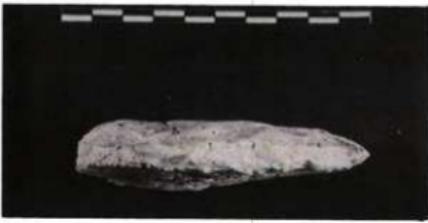
イ



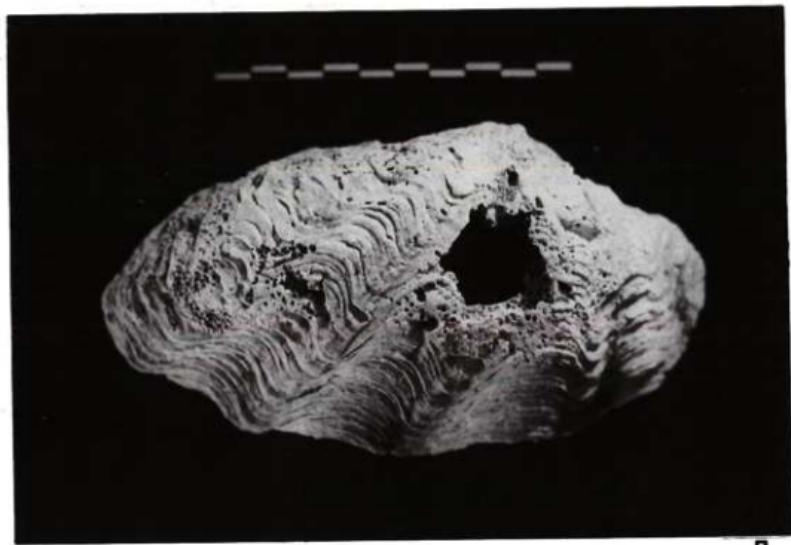
ロ



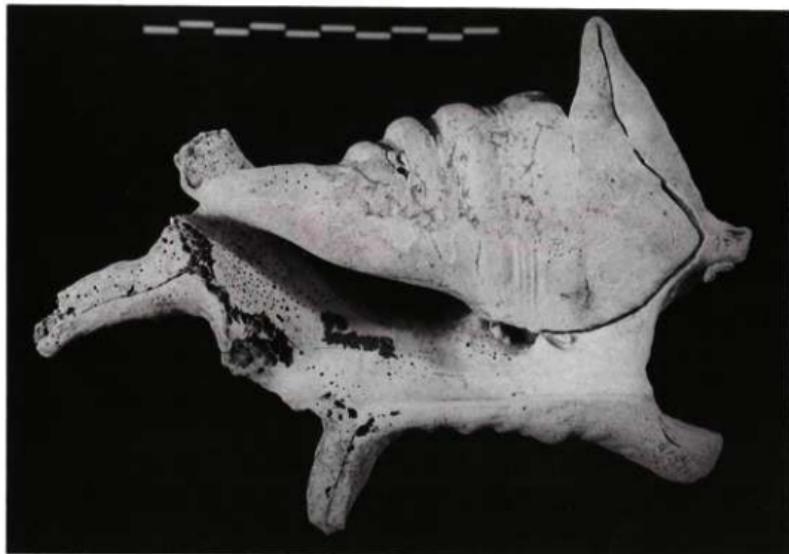
図版 31. 貝斧類似の貝殻片



圖版32. 漆圓形貝製品

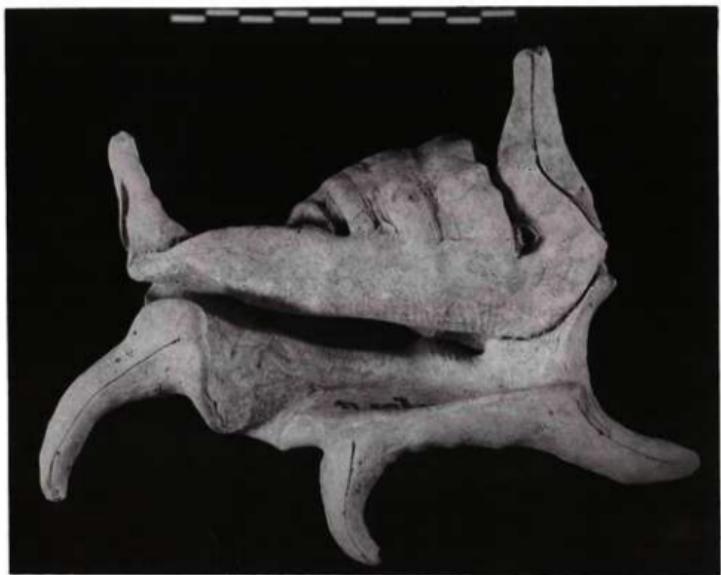


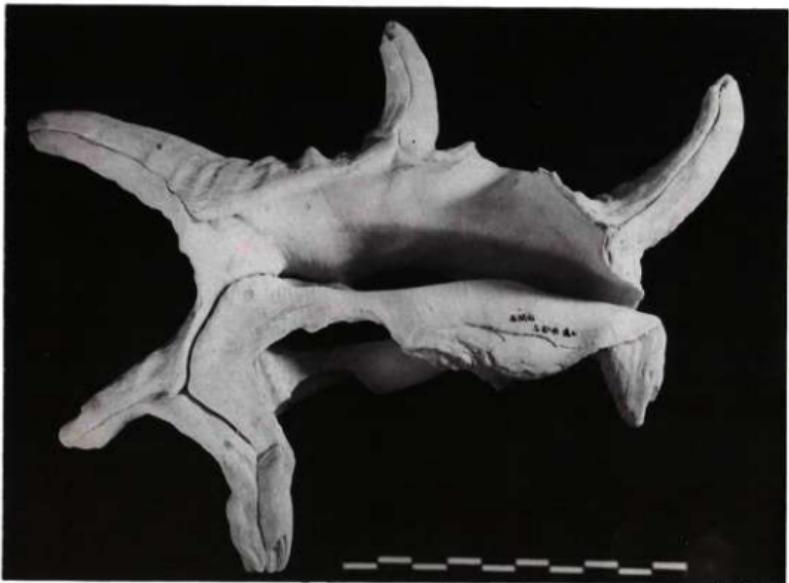
図版33. イ、ホラガイ腹面有孔製品 ロ、シャコガイ有孔製品



図版34. スイジガイ付刃突起製品

図版35. シジガイ付刃突起製品

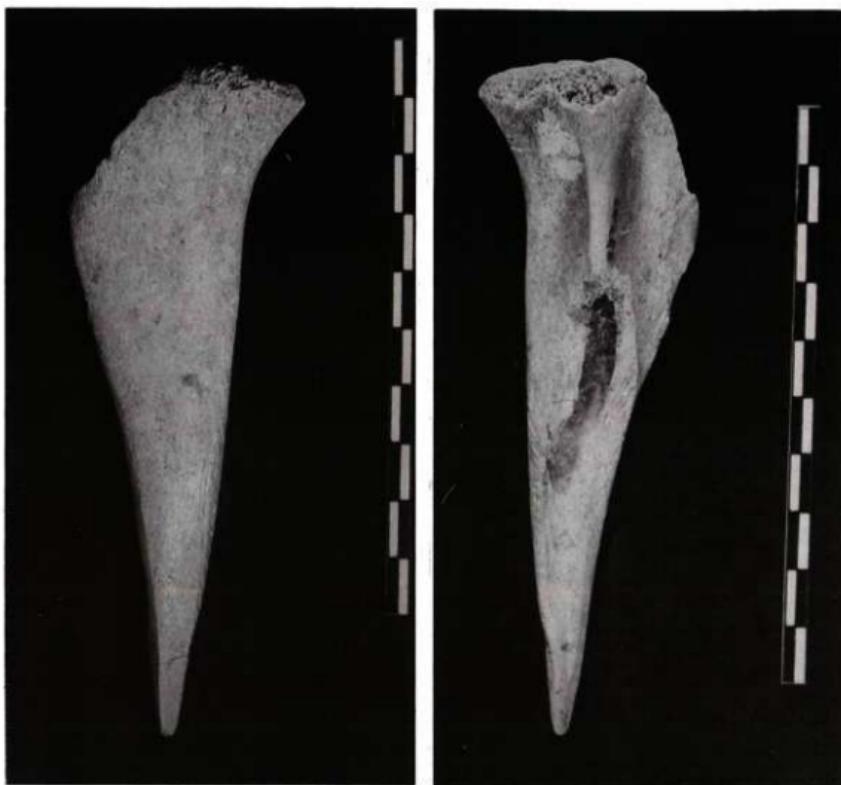




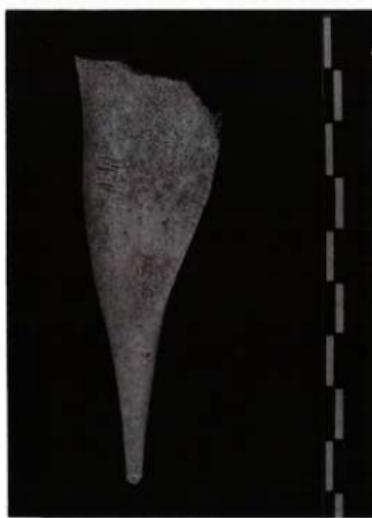
図版 36. シガガイ付刃突起製品



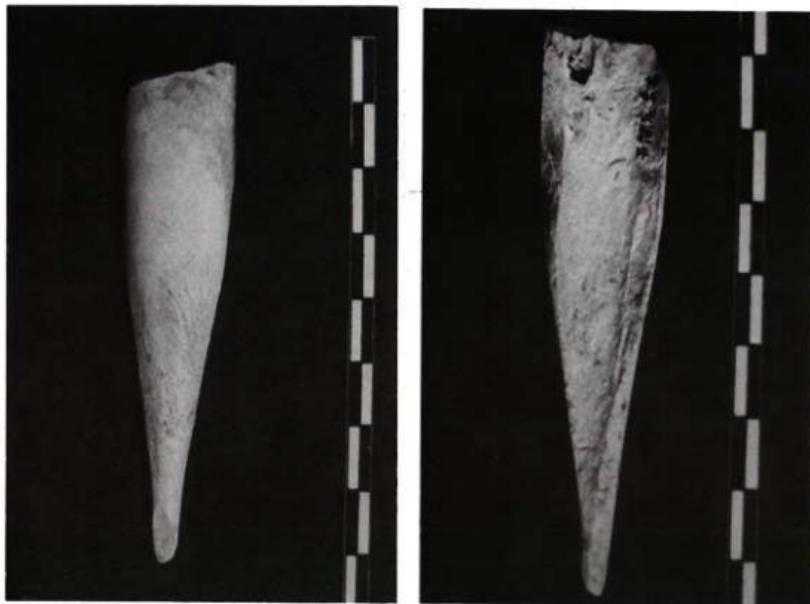
図版37. イ、スイジガイ付刃突起製品　ロ、猪牙製品



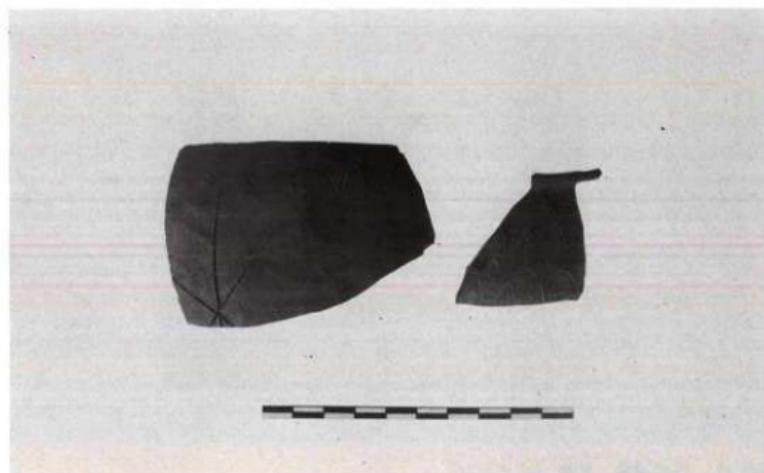
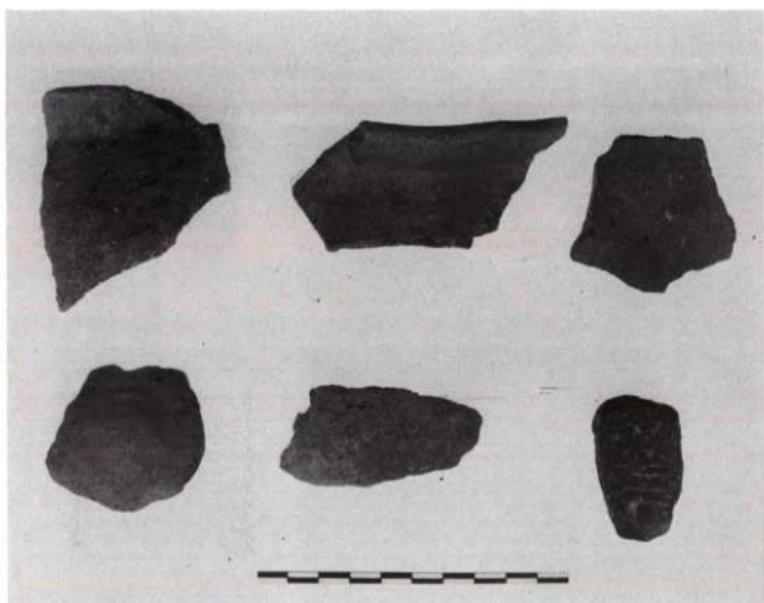
圖版 38. 骨 锥



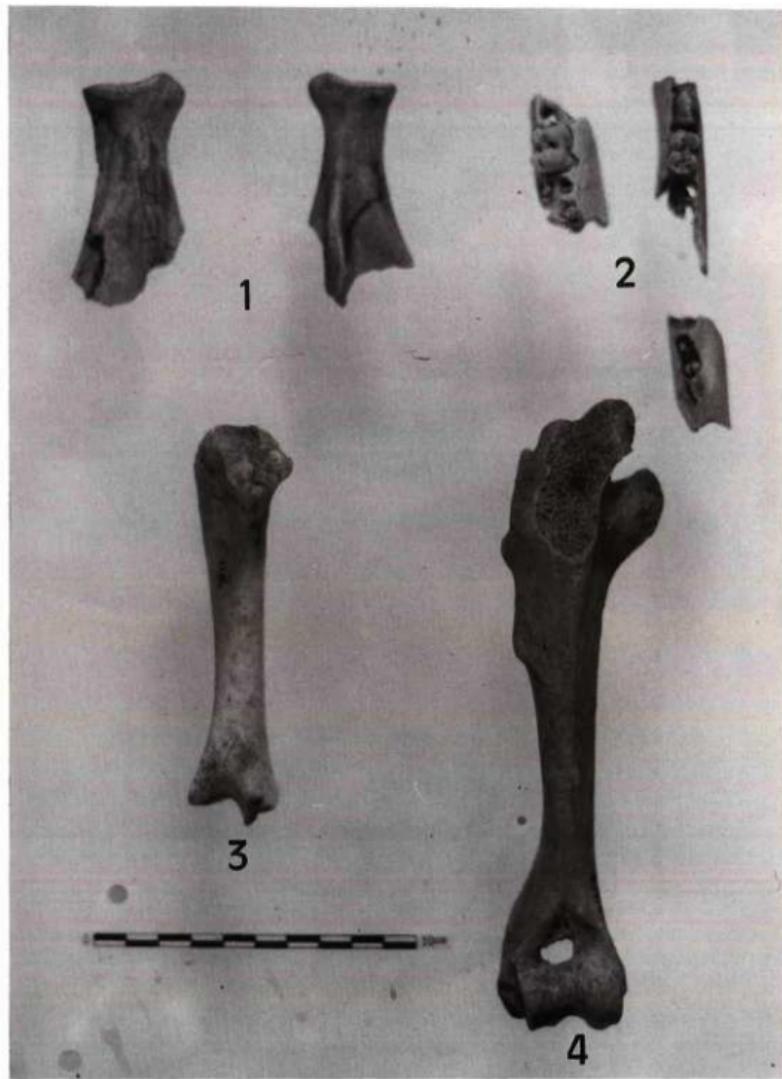
圖版 39. 骨錐



図版 40. 骨 線

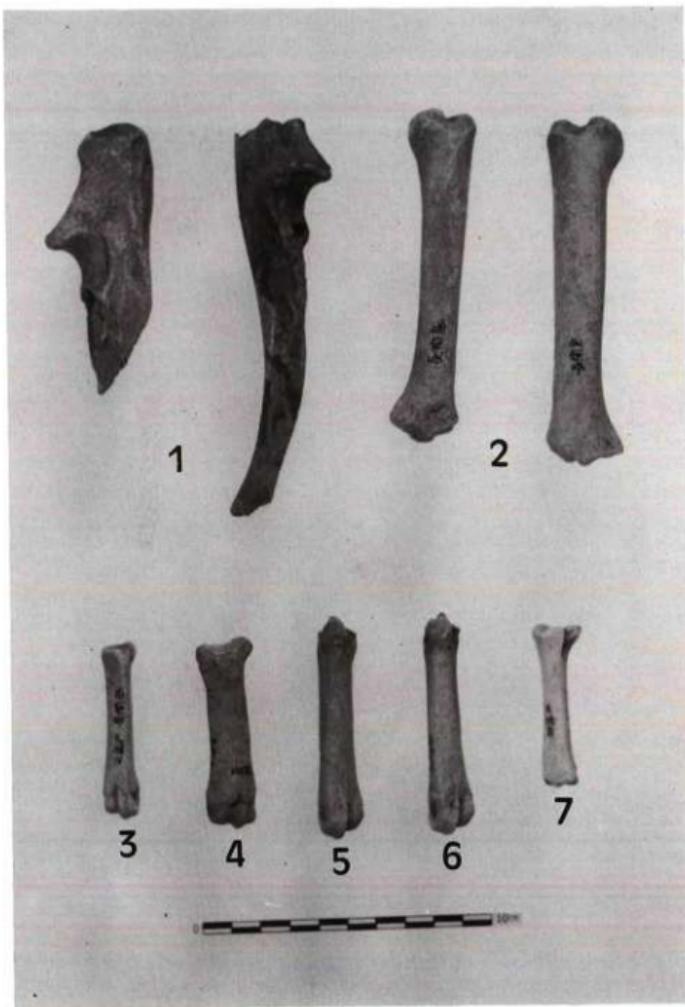


図版41. 土 器 (上) 陶 器 (下)



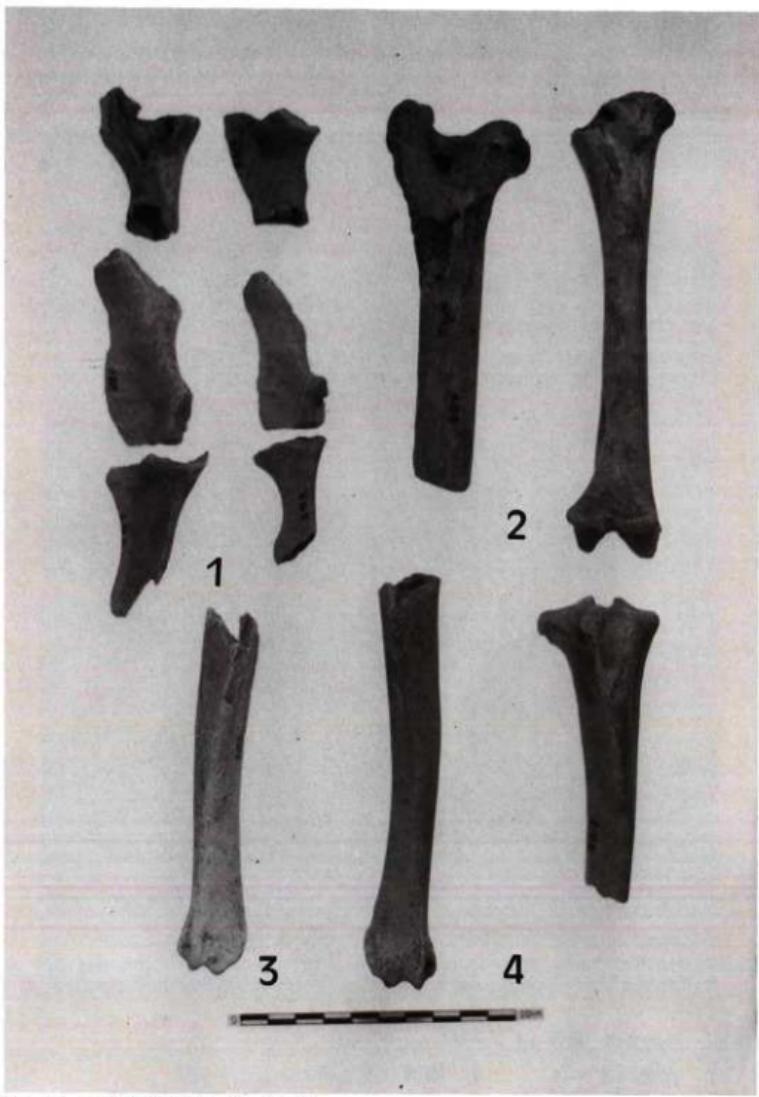
図版 42. 自然遺物 獣骨 (イノシシ)

1. 肩甲骨 (左・右)
2. 頸骨
3. 左上腕骨 (近位端～)
4. 右上腕骨 (骨端はずれ)



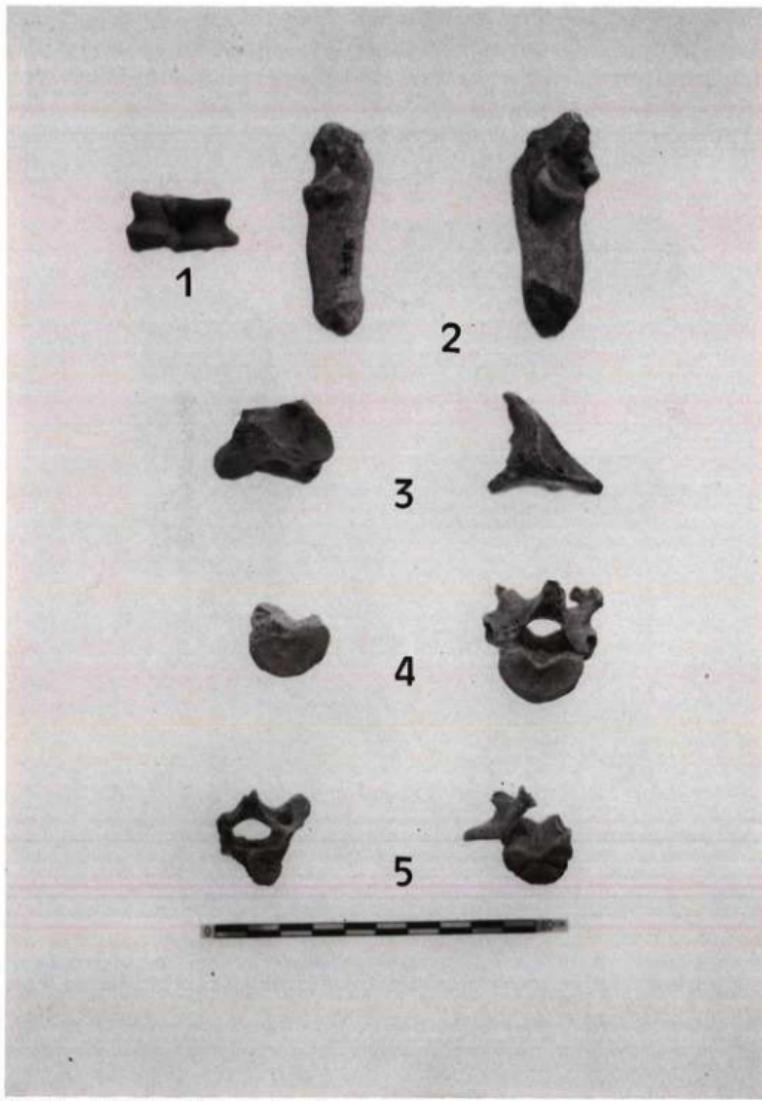
図版43. 自然遺物 電骨 (イノシシ)

1. 尺骨 (左・右)
2. 楔骨 (左・右)
3. 第4中手骨 (右)
4. 第3中手骨 (左)
5. 第3中足骨 (左)
6. 第3中足骨 (左)
7. 第3中足骨 (右)



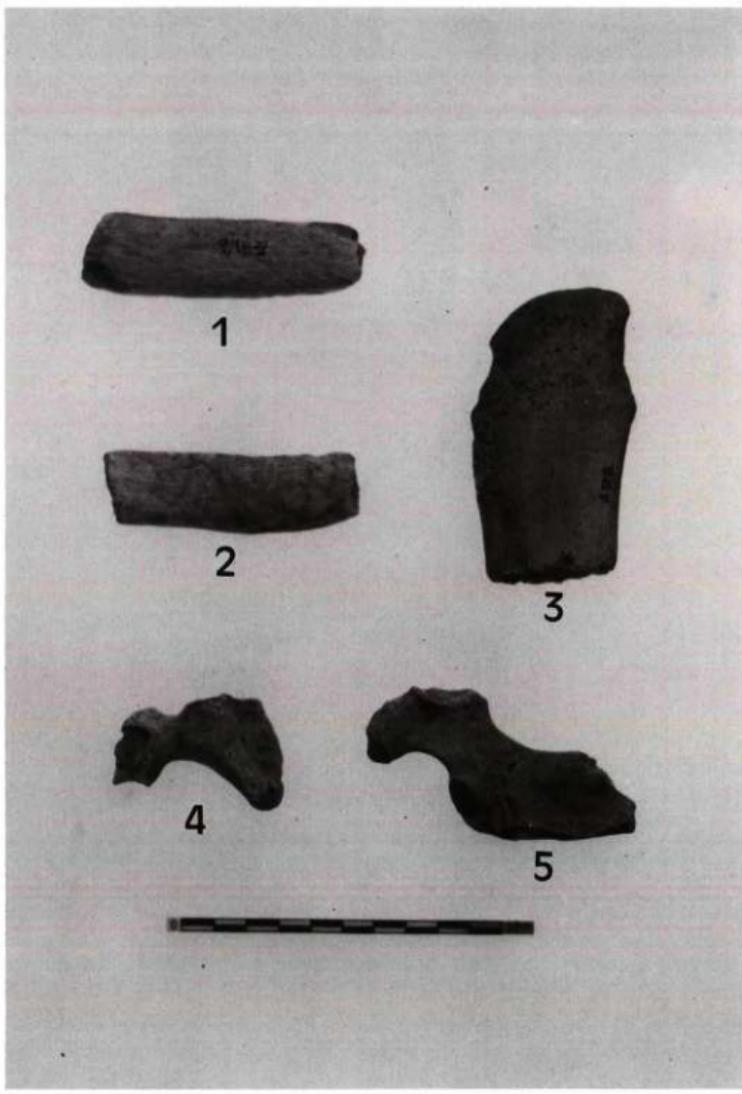
図版 44. 自然遺物 獣骨 (イノシシ)

1. 上段一寛骨 (右) 下段一同 (左)
2. 大腿骨 (左) 3. 頭骨 (左) 4. 同 (右)



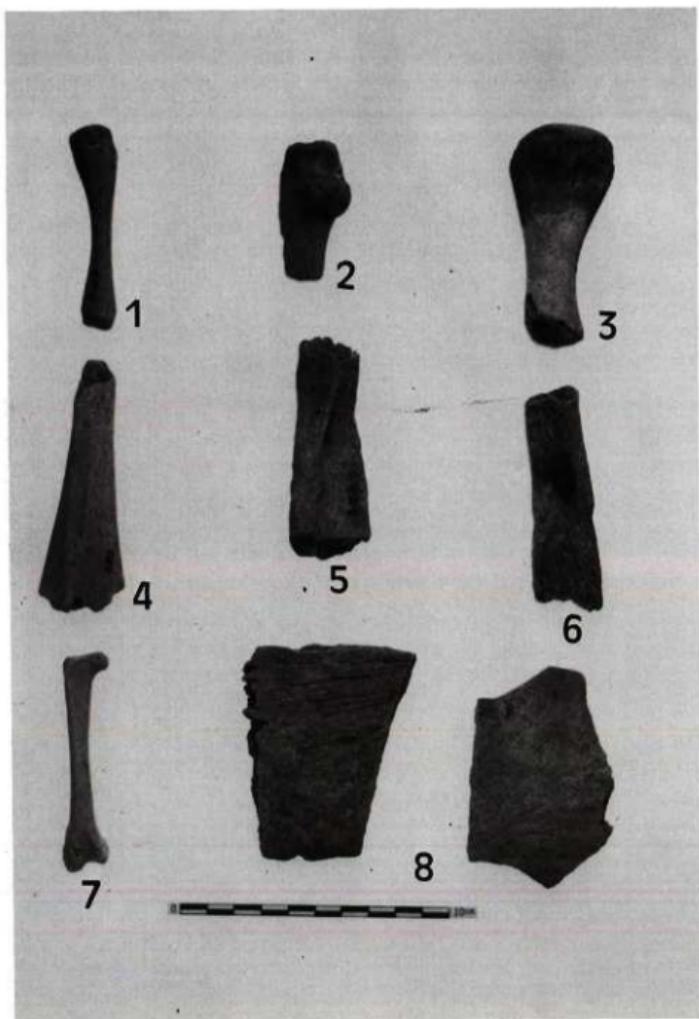
図版45. 自然遺物 獣骨 (イノシシ)

1. 距骨 2. 跖骨 (左・右) 3. 第一頸椎骨
4. 腰椎骨 5. 胸椎骨



図版46. 自然遺物 獣骨 (ジュゴン)

- 1~2. 肋 骨 3. 四肢骨片
4. 椎 体



図版 47. 自然遺物 鳥・獸骨 (鳥、カメ)

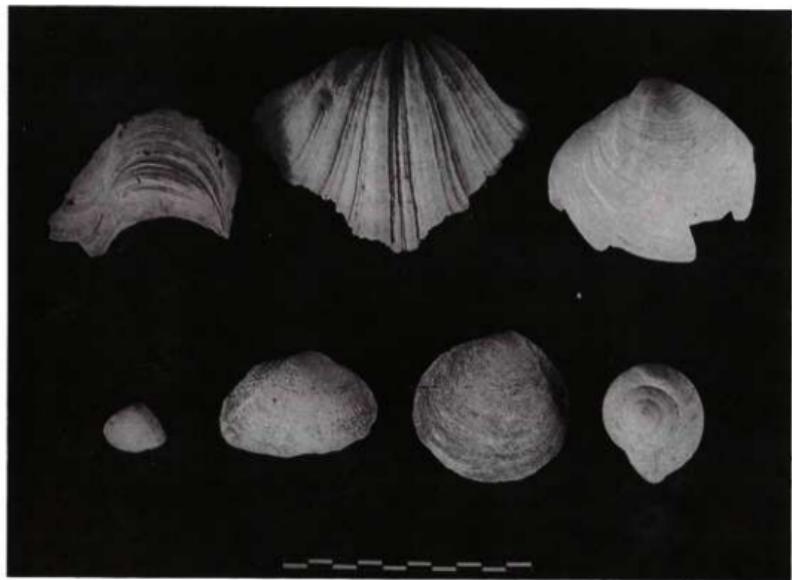
- 1~6・8 爬虫類 (カメ) 7. 鳥類
 1. 指骨 2. 尺骨 3. 大腿骨
 4. 鳥口・肩甲骨 5・6. 緑甲板 8. 肋骨板
 7. 大腿骨



図版 48. 自然遺物 貝類



圖版 49. 自然遺物 貝類



図版 50. 自然遺物 貝類

附① 宮古島における貝斧の分布

安里 嗣淳

宮古島には長間底遺跡における発見より以前に、すでにいくつかの遺跡で貝斧が発見されている。ただこれまで陶磁器を伴う集落遺跡や洞穴などからの発見であり、明確に先史時代遺跡に伴うものとしては確認されていなかったのである。したがって、これまで貝斧の伴出がどのような意味をもつのか、その位置づけができなかつたのである。もっとも、陶磁器と共に貝斧の位置づけについてはひきつづき重要な課題のひとつとして残されている。以下、これまでの発見例を紹介する。

宮古島における貝斧は長間底遺跡を除いて6遺跡8個が知られている。いずれもシャコガイ製である。

1. カアラ洞穴発見の貝斧

下地馨氏蔵。城辺町砂川のカアラ貝塚の発見。

イ、A シャコガイの左殻を利用したもの、「ちょうつがい部利用型」である。

刃部のみを研磨し、刃縁は側面観が中心軸をとおる。前面・背面・外縁側面はほとんど自然面を残し、殻内側面と基端は打剥調整されている。

ロ、B シャコガイの左殻、ちょうつがい部を利用したものである。ちょうつがい部が小さいためか、幅は殻内側を大きくとりこんでいる。加工は殻内側面と基端に打剥が施され、刃部のみ研磨されている。背面・前面・外表側面は自然面を残す。

2. 成川井洞穴発見の貝斧

C 下地和宏氏の発見、平良市教育委員会蔵。シャコガイの左殻、ちょうつがい部を利用したものである。刃部を研磨してある。洞部まで滑らかになっているが、この部分は研磨ではなく、長期の手なれによるものようである。加工は他に殻内側面、基端への打剥がある。この打剥の境もゆるやかになっている。

3. 保良元島発見の貝斧

D 下地馨氏蔵。陶磁器や宮古土器を主体に出土する集落跡から発見されたものである。シャコガイの左殻、ちょうつがい部を利用したものである。刃部のみを研磨し、殻内側面、基端に打剥を施す。

4. 宮国元島発見の貝斧

E 前ヌヤー北側石壁内採集。沖縄県教育庁文化課蔵。シャコガイの右殻、ちょうつがい部を利用したものである。刃部および前面の稜が研磨されている。殻内側面と基端は打剥によって調整されている。

F 発掘区7地区チ-50Ⅲ層の出土。沖縄県教育庁文化課蔵。シャコガイの右殻、ち

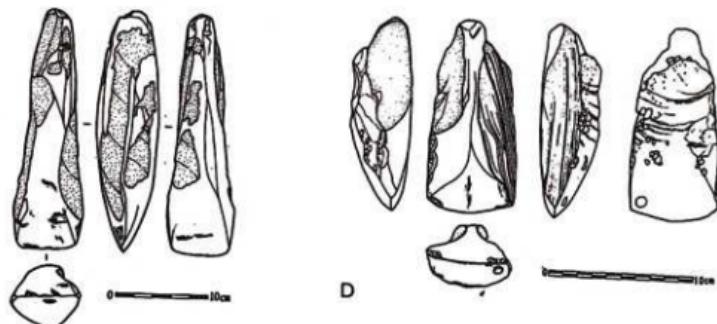
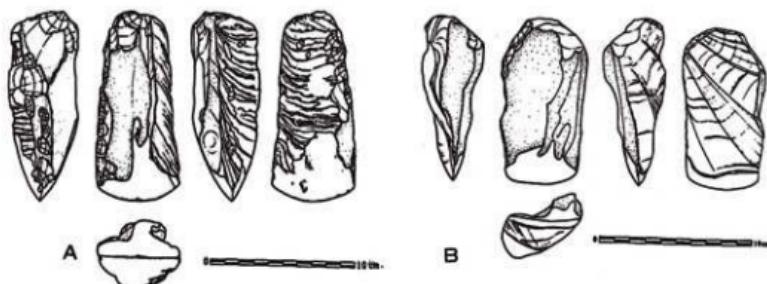
ょうつがい部を利用したものである。刃部を研磨し、殻内側面と基端を打剥調整している。刃縁の磨耗が著しい。

5. 石原城^{いはらじょう}遺跡発見の貝斧

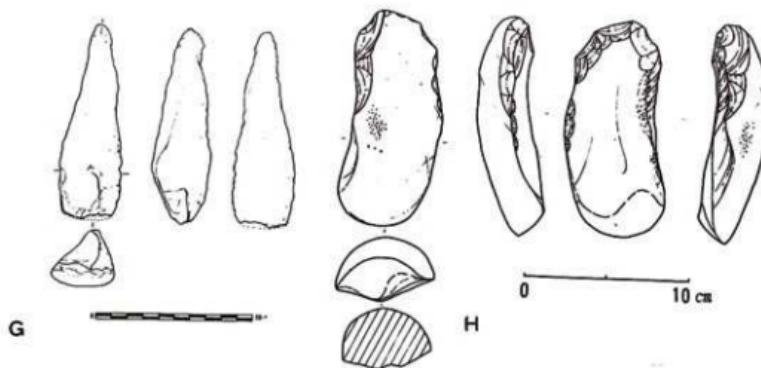
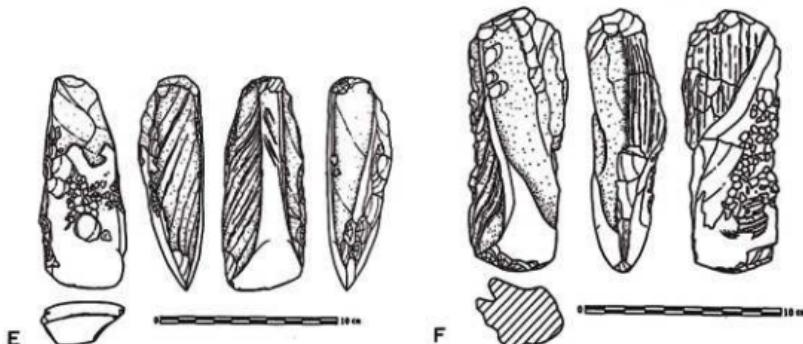
G 沖縄県教育庁文化課蔵。シャコガイの左殻、ちょうつがい部を利用したものである。未製品というべきもので、研磨面は見当たらない。打剥によって斧の形に仕上げてあるが、刃部の砥ぎ出しがまだ行われていない。

6. 平瀬尾神崎発見の貝斧

H 平良市文化財保護審議会の発見、平良市教育委員会蔵。シャコガイの右殻左側（後背側）を利用して。かなり磨耗している。片面からのみ刃部研磨を施し、片刃状に仕上げてある。



A・B…カアラ貝塚 C…成川井遺跡 D…保良元島遺跡



E・F…宮国元島遺跡 G…石原城遺跡 H…平瀬尾神崎遺跡

附③ 平良市平瀬尾神崎遺跡発見の貝斧

平良市教育委員会社会教育課

文化財担当 砂川玄正

平瀬尾神崎遺跡は宮古島の東北海岸に突き出た平瀬尾神崎のつけ根の台地の上にある。1983年6月、地主が一帯の草木除去のためブルドーザーを入れたことがきっかけで発見されたものである。市文化財保護審議会としてこの地を踏査し、新発見の遺跡であることと、陶磁器や貝殻の出土、そして貝斧の存在を確認したのである。

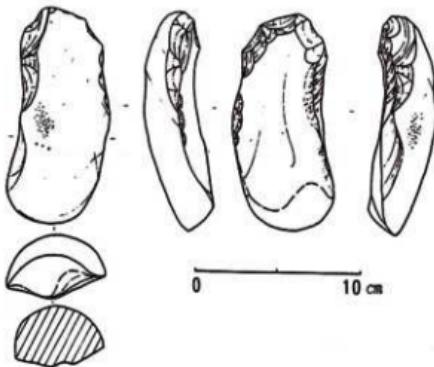
貝斧はシャコガイを利用したものである。外殻が剥がれて、内層との分離面が斧の背面としてあらわれている。一見石の如きであるが、形態や生長線から貝であることがわかる。

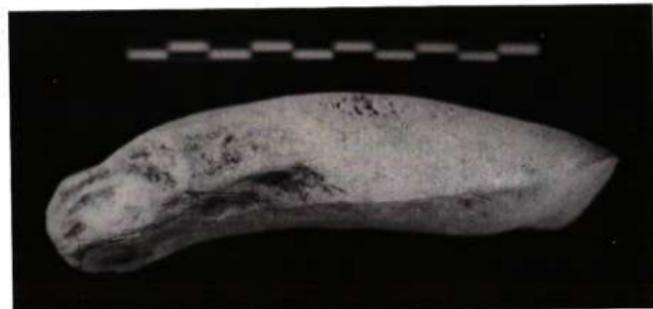
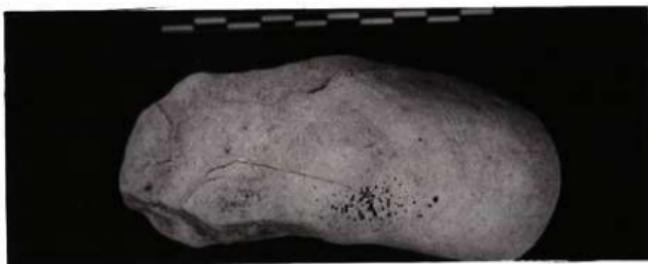
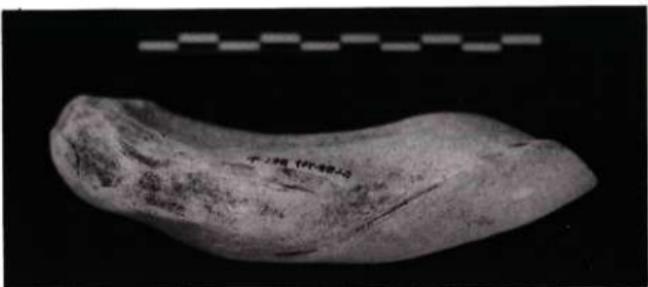
刃部に研磨が施され、前面側（内側）にのみ斜めの刃面が砥ぎ出されている。背面側の刃部相当部はとくに加工はなく、背面の自然面（分離面）がそのまま刃面になっている。両側面は基部の上半部に打剥が加えられ、緊縛に都合のいいように抉りが入っている。基端も打剥されている。

全体形は貝の自然形態にかなり規制されている。平面形（前面・背面）は上半が大きく片側へ傾いている。側面形も内側へカーブしている。

刃部は平面観が弧状を呈し、角がない。

長さ 12.9 cm、刃部幅 4.9 cm、胴部幅 5.6 cm、基端幅 4.3 cm、厚さ 2.9 cm、重量 350 g。





平瀬尾沖崎遺跡発見の貝斧

沖縄県文化財調査報告書第56集

宮古城辺町

長間底遺跡

発掘調査報告

編集 沖縄県教育庁文化課
電話 0988-66-2731

発行 沖縄県教育委員会
1984年3月25日

印刷 文進印刷株式会社
那覇市上間567番地
電話 0988-55-2323(代)

